岡山大学構内遺跡調査研究年報2

昭和59年度

岡山大学埋蔵文化財調査室

岡山大学構内遺跡調査研究年報2

昭和59年度

岡山大学埋蔵文化財調査室

序　　文

岡山大学に埋蔵文化財調査室が設置されて早くも３年目を迎えることになりました。

当初は運営や研究活動にややもすると不充分な面が見られましたが，今ではそれらはかなり克服され，学内における土木工事の監査と埋蔵文化財の保護・調査に大きな役割を担うようになったといっても過言ではありません。もちろん学内の諸工事に際しての監査体制が可能になったことは，調査室の独力の成果ではなく，学内外の諸機関の理解と協力があったからに他なりません。

このたび，一昨年７月から進めていた鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区（外来棟改築予定地）の発掘調査を終了しました。その結果，５枚の生活面が明らかとなり，それにともない検出された遺構の数と発見された遺物の量は膨大なものとなりました。それらの整理と分折を通じて本遺跡の性格と構造を解明し，わが国の歴史の中に位置づける作業は，これから始まる訳です。また，大学における埋蔵文化財の調査研究の意義も合わせて再認し，今後の調査室の調査・研究活動について学内外のいっそうの理解を得るための努力をしたいと思います。

今回の調査・研究に多くの助言と協力を頂いた岡山県教育委員会文化課，岡山県史編纂室，岡山市教育委員会文化課，岡山大学埋蔵文化財保護対策検討専門委員会，岡山大学事務局および発掘調査に援助を願った岡山大学文学部考古学研究室や調査補助員の諸氏ならびに作業員諸氏に厚く御礼を申し上げます。

1985年３月30日

岡山大学埋蔵文化財調査室長

近　藤　義　郎

例　　言

1　本年報は岡山大学構内において昭和59年４月から同60年３月末日までに実施した埋蔵文化財の調査と保存，および岡山大学埋蔵文化財調査室の活動成果をまとめたものである。

2　岡山大学構内の埋蔵文化財の調査に際しては，国土座標を測量等の基準としているが，岡山大学津島地区と同鹿田地区ではその設置基準を次のように定めた。

1）　岡山大学津島地区では，国土座標第５座標系（Ｘ＝－144,500，Ｙ＝－37,000）を基点とし，一辺50ｍの方形の地区割をして遺跡の位置を表示した。また，津島キャンパスは調査の便宜上，津島北地区と同南地区に二分する（図版２）。

2）　岡山大学鹿田地区では，国土座標第５座標系（Ｘ＝－149,800，Ｙ＝－37,400）を基点とし，座標軸をＮ15°Ｅに振ったものを構内座標とする。地区割は一辺５ｍの方形を用い，調査に対応した（図版１）。

3）　本文中で用いる方位は鹿田地区は真北を，津島地区では磁北を使用している。

3　岡山大学構内及び関連施設内の遺跡の名称は，農学部演習林内に分布する古墳群等の周知の遺跡の場合，そのまま踏襲する。津島地区構内で新たに発見された遺跡は，遺存する小字名を用いるか，津島岡山大学構内遺跡と仮称し，地点ごとに任意の記号を用いて示す。また，鹿田地区は全域をこれまで用いられてきた「鹿田遺跡」を使用する。

4　本書で使用した遺構の略号は次のとうりである。ＳＢ：住居址・掘立柱建物，ＳＥ：井戸・野壺，ＳＫ：土壙墓・土壙，ＳＤ：溝，ＳＡ：柵状遺構・柱穴列，ＳＸ：その他

5　遺構の番号は調査時の仮称のままである。

6　遺構・遺物の実測と整図は青木進次郎，家田淳一，池上博，今津啓子，大久保徹也，小池幸夫，駒井正明，栄一郎，鈴木英男，鈴木康之，高井健司，田中裕介，千葉豊，新納泉，八谷隆生，馬場洋，平井典子，松井潔，宮原博幸，安井ともえ，山田雅子，山本悦世，吉留秀敏，力竹孝典がおこなった。遺物の撮影は栄一郎が担当した。

7　本文は栄一郎，山本悦世，吉留秀敏が各章を分担執筆した。執筆者名は各章の末尾に記した。

8　編集は近藤義郎の指導のもとに吉留秀敏，山本悦世，栄一郎が当った。

岡山大学構内遺跡調査研究年報２　昭和59年度

目　　次

第Ⅰ部　岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会規程…… 1
2　岡山大学埋蔵文化財調査室設置要項…… 2
3　昭和59年度普及活動…… 2

第Ⅱ部　昭和59年度岡山大学構内遺跡発掘調査報告

第１章　昭和59年度岡山大学構内遺跡調査の概要 …… 3
第２章　鹿田遺跡AU～BD28～39区の発掘調査概要 …… 5
1　調査の経過…… 5
2　層序…… 5
3　遺構の概要…… 5
4　小結……19
第３章　昭和59年度岡山大学構内の試掘・立合調査報告 ……22
第４章　昭和59年度構内遺跡調査のまとめ ……26

挿　図　目　次

図１　南北断面土層図…… 5
図２　弥生～古墳時代遺構全体図…… 6
図３　竪穴式住居址ＳＢ23…… 7
図４　ＳＢ23出土遺物…… 8
図５　竪穴式住居址ＳＢ16…… 9
図６　ＳＢ16出土遺物……10
図７　竪穴式住居址ＳＢ24……11
図８　ＳＢ24出土遺物……11

図９　井戸ＳＥ22……12
図10　ＳＥ22出土遺物……13
図11　井戸ＳＥ25……14
図12　ＳＥ25出土遺物……15
図13　井戸ＳＥ50……16
図14　ＳＥ50出土遺物……17
図15　土壙ＳＫ122 ……18
図16　ＳＫ122出土遺物 ……18
図17　土器棺ＳＫ１……19
図18　ＳＫ１出土遺物……20
図19　弥生～古墳時代主要遺構変遷模式図……21
図20　津島地区立合調査地点位置図……22
図21　南宿舎合併処理槽関係配水管埋設予定地の平面図と断面土層図 ……23
図22　出土遺物……23
図23　津島地区立合調査地区模式土層柱状図……24
図24　鹿田遺跡ＢＴ30区試掘調査地点東側土層断面図と関連の出土遺物 ……24

図　版　目　次

図版１　鹿田地区全体図と調査地点
図版２　津島地区全体図
図版３　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区
　１　ＡＷ～ＢＡ36～39区付近（南から）　２　ＡＵ～ＢＡ28～32区付近（東から）
図版４　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区
　１　竪穴式住居址ＳＢ23（東から）　２　ＳＢ23出土遺物
図版５　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区
　１　竪穴式住居址ＳＢ16（東から）　２　竪穴式住居址ＳＢ24（西から）
図版６　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区
　１　井戸ＳＥ22（西から）　２　井戸ＳＥ22（西から）
図版７　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区
　１　井戸ＳＥ25（東から）　２　ＳＥ25出土遺物
図版８　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区

1　井戸ＳＥ50（北から）　2　ＳＥ50出土遺物

図版９　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区

1　土壙ＳＫ122（北から）　2　土壙ＳＫ122（真上から）

図版10　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区

1　土器棺ＳＫ１（南から）　2　ＳＫ１出土遺物

図版11　津島南地区ＢＩ16～19，ＢＪ18・19区

1　立合調査地点（東から）　2　立合調査地点（西から）　3　土壙検出状況（真上から）　4　土壙調査状況（西から）

第Ⅰ部　岡山大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会規程

第１条　岡山大学施設設定委員会規程（昭和41年岡山大学規程第３号）第９条の規定に基づき，岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会（以下「専門委員会」という。）を置く。

第２条　専門委員会は，岡山大学の敷地内の埋蔵文化財の保護対策について必要な事項を審議する。

第３条　専門委員会は，次の各号に掲げる委員で組織する。

一　各学部長及び教育部長のうちから互選された者１人

二　施設設定委員会のうちから各学部及び教養部ごとに推薦された者１人

三　専門的知識を有する本学の教官のうちから２人

四　その他学長が必要と認めた者

第４条　専門委員会に委員長を置き，前条第１号の委員をもって充てる。

第５条　委員長は，会議を招集し，その議長となる。

２　委員長に事故あるときは，委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

第６条　委員長が必要があると認めたときは，委員以外の者の出席を求め，その意見を聞くことができる。

第７条　専門委員会に幹事を置き，庶務部長，経理部長，施設部長，及び学生部次長をもって充てる。

第８条　専門委員会の庶務は，施設部において処理する。

附　則　この規則は，昭和57年２月25日から施行する。

委員長	緒方正名	（医学部教授）			
委員	吉田　晶	（文学部教授）		小川勝士	（医学部教授）
	近藤義郎	（文学部教授）		小田嶋梧郎	（歯学部教授）
	稲田孝司	（文学部助教授）		大和正利	（薬学部教授）
	上村明廣	（法学部教授）		中田高義	（工学部教授）
	橋本博之	（経済学部教授）		小西国義	（農学部教授）
	難波良司	（教育学部教授）		成田英夫	（教養部教授）
	武丸恒雄	（理学部教授）		野原　望	（医学部教授）

幹　事	近　藤　　寛	（庶務部長）	中　岡　善　吉	（施設部長）
	濱　中　敬　三	（経理部長）	島　田　祥　生	（学生部次長）

2　岡山大学埋蔵文化財調査室設置要項

1　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会（以下「専門委員会」という。）に，岡山大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

2　調査室は，専門委員会に必要な資料を提供するため，岡山大学の敷地内の埋蔵文化財に関する次の業務を行う。

一　保護，調査，発掘等の実施計画の立案に関すること。

二　保護，調査，発掘等の実施に関すること。

三　保護，調査，発掘等の報告書の作成に関すること。

四　その他必要な事項

3　調査室に，室長及びその他必要な職員を置くことができる。

4　この要項は，昭和58年３月１日から実施する。

室　長	（併）近　藤　義　郎	（文学部教授）	
室　員	（専）吉　留　秀　敏	（文学部助手）	
	（専）山　本　悦　世	（技術補佐員）	昭和59年９月30日まで
		（歯学部助手）	昭和59年10月１日から
	（専）新　納　　泉	（技術補佐員）	昭和59年５月31日まで
	（専）平　井　典　子	（技術補佐員）	昭和59年８月31日まで
	（専）栄　　一　郎	（技術補佐員）	
	（専）池　上　　博	（技術補佐員）	昭和59年８月31日まで
	（専）今　津　啓　子	（技術補佐員）	昭和59年９月30日まで

3　昭和59年度普及活動

対策，検討及び普及活動

昭和59年５月19日　鹿田遺跡現地説明会

埋蔵文化財調査室刊行資料

昭和59年５月19日　岡山大学構内遺跡現地説明会資料（鹿田地区　医学部附属病院外来診療棟予定地）

昭和60年２月28日　岡山大学構内遺跡調査研究年報１　昭年58年度

第Ⅱ部　昭和59年度岡山大学構内遺跡発掘調査報告

第１章　昭和59年度岡山大学構内遺跡調査の概要

昭和59年度には以下のように試掘調査２件，発掘調査１件，立合調査19件の計22件の調査を実施した。

試掘調査

医学部附属病院西病棟北側受水槽工事予定地（鹿田地区ＢＴ29・30区）

医療短期大学新営予定地（鹿田地区）

発掘調査

医学部附属病院外来診療棟改築予定地（鹿田地区ＡＵ～ＢＤ28～39区）

立合調査

農学部構内圃場整備事業（津島南地区ＢＦ～ＢＩ18～22，ＢＢ～ＢＧ22～27区）

医学部附属病院ＮＭＲ－ＣＴ室新設関係排水施設取付工事（鹿田地区ＢＧ～ＢＨ17～18区）

医学部旧基礎医学棟中庭駐車場整備工事（鹿田地区ＢＤ～ＢＨ64区）

医学部附属病院外来診療棟改築関係給水管埋設工事（鹿田地区ＢＡ23区）

医学部附属病院外来診療棟改築関係フェンス設置工事（鹿田地区ＡＹ・ＢＡ43区）

医学部附属病院外来診療棟改築関係給排水その他工事・スプリンクラー配管替および撤去工事（鹿田地区ＡＴ・ＡＵ～39・40区）

岡山大学総合情報処理センター通信用管路埋設工事（津島北地区ＡＷ・ＡＸ11，ＡＺ・ＢＡ12・13区）

医学部附属病院外来診療棟改築関係電柱架設工事（鹿田地区ＡＥ37区）

医学部構内埋設ガス管腐食調査（鹿田地区ＢＤ57区）

医学部附属病院中診北病棟外来リカバリー室医療機器用電源取付工事（鹿田地区ＢＧ33区）

医学部附属病院厨房棟東側埋設ガス管修繕工事（鹿田地区ＢＳ・ＢＴ21区）

医学部附属病院看護婦宿舎前水道管修繕工事（鹿田地区ＤＣ29区）

医学部附属病院焼却炉棟北西端水道管修繕工事（鹿田地区ＣＤ10区）

岡山大学非常勤講師宿泊施設新営工事（津島南地区ＢＩ16区）

岡山大学南宿舎合併処理槽取付工事（津島南地区ＢＩ13区）

医学部附属病院西病棟正面駐車場整備工事（鹿田地区ＤＨ・ＤＩ28～29区）

岡山大学南宿舎合併処理槽関係配水管埋設工事（津島南地区ＢＩ16～19，ＢＪ18・19区）

医学部附属病院霊安室前駐車場整備工事（鹿田地区ＤＪ・ＤＫ11区）

医学部附属病院外来診療棟関係ガス管引き込み工事（鹿田地区ＢＡ～ＢＢ15～23区）

以上のうち医学部附属病院外来診療棟改築関係の調査は昨年度より継続したものである。なお，調査終了後は改築工事が開始されたためにその関連工事にともなう立合調査を実施してい

る。

試掘調査では医学部附属病院構内の二地点で保存の良好な包含層を確認した。

津島地区の立合調査は昨年度に引き続き，構内での新たな埋蔵文化財の確認に努力し，あわせてその破壊のないよう努めた。調査の結果，岡山大学南宿舎合併処理槽関係配水管埋設工事予定地において遺物包含層と遺構を発見した。これについては工事による掘削が遺物包含層よる上位に止まることから，工事実施にあたって遺物包含層へ影響が生じないように指導した。

鹿田地区の立合調査は各種工事により埋蔵文化財に影響が生じないよう指導し，進めた。医学部附属病院ＮＭＲ－ＣＴ室新設関係排水施設取付工事では掘削が一部遺物包含層におよぶ可能性がでたが，協議の結果，工法を変更し掘削を浅くすることで遺物包含層に影響を生じないように指導した。なお，この工事と医学部附属病院看護婦宿舎前水道管修繕工事，さらに試掘調査の医療短期大学新営予定地においてそれぞれ遺物包含層が確認されたことから，鹿田遺跡の範囲が従来の推定遺跡範囲より東側に大きく拡がることが判明した。　（吉留秀敏）

第２章　鹿田遺跡AU～BD28～39区の発掘調査概要

１　調査の経過

本年度のＡＵ～ＢＤ28～39区の調査は昨年度から継続して，昭和59年４月２日から同年８月31日まで実施し，本調査区の調査を完了した。昭和59年５月19日には現地説明会をおこなった。調査面積は昨年度と同様である。また本調査と並行して，旧外来診療棟跡地に４ケ所の試掘調査を実施した。試掘調査では一部に遺構・遺物が残存していたが，遺跡の大部分はすでに建物基礎によって削平されていたとみられた。

２　層　　序

鹿田遺跡では前年度の年報で述べたように第Ⅰ～Ⅷ層の基本層序を設定している。[注1] 本調査区では地区割の基準線と並行して東西と南北に各２本の土層観察用の土手を設けたが，各土手断面の層序は基本的に一様であり，全体に東北から西南に向って傾斜している。ここではＢＣ31～ＢＤ31区付近の南北土手の層序を取り上げて説明する（図１）。

第Ⅰ層は表土および造成土であるが，すでに取り除かれている。第Ⅱ層（青灰色砂質土）は近代の水田土壌である。第Ⅲ層は中世の包含層として設定しているが，本調査区では確認できていない。第Ⅳ層（暗黄灰色微砂質土）は25～40㎝前後の層厚を示し，古墳時代を下限とするものとみられる。第Ⅴ層（黄灰色微砂質土）は弥生時代から古墳時代初頭の遺物包含層で，色調の違いによって第Ⅴａ層と第Ⅴｂ層に二分することができる。この第Ⅴａ・Ⅴｂ層の下面から弥生時代～古墳時代初頭の遺構が掘り込まれている。第Ⅵ層（黄褐色微砂質土）以下は現在のところ地山と判断している。

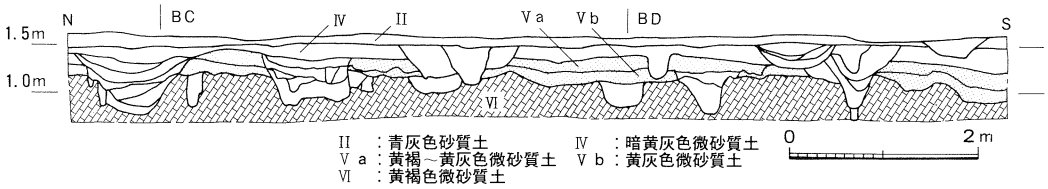


図１　南北断面土層図　縮尺１／80

３　遺構の概要（図２）

１）　住居址

本年度は弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけての住居址27棟を調査した。時期別に細分すると次のようになる。中期後半３棟・後期前葉１棟（中葉に近い）・後期中葉６棟・後期後葉６棟・後期末葉11棟・古墳時代初頭６棟・不明２棟である。床面積は最小で10㎡，最大で64㎡を測る。また，住居址内での床面数は１枚から５枚まであるが，２～３枚が中心的である。ここでは，弥生時代中期・後期・古墳時代初頭の３期に分けて代表的な住居址をあげて概

説したい。

竪穴式住居址ＳＢ23はＢＣ30区に中心をもつ円形住居址で，２枚の貼り床が検出されている（図３，図版４）。

１次住居址は南北6.6ｍ，東西６ｍの楕円形に廻る壁溝と６本の柱穴を有する。柱穴の底部はいずれも標高0.7ｍ前後にあり，また，径は0.5～0.6ｍを測る。中央穴は周囲に1.2ｍ×0.8ｍの浅い落ちこみをもつ。床面レベルは標高0.98ｍ前後で全面に厚さ５㎝の貼り床が認められる。

２次住居址では壁溝の検出は困難であり，規模は不明である。柱穴の重複は１ケ所のみで他は１次のものを踏襲しているが，中央穴については，貼り床が上部を厚く覆っており，この段階では存在していないと考えられる。床面レベルは標高1.0～1.1ｍで南に向って傾斜する。貼り床は南半部を除いて厚さ５㎝で認められ，床面のほぼ中央には炭化物が広範囲にわたって厚く散布している。

出土遺物は両住居址及び柱穴からそれぞれ出土しているが，そのほとんどは２次住居址に関連するものである（図４）。２次住居址から出土した遺物としては壺（１），甕（４～６），高

図２　弥生～古墳時代遺構全体図　１／500

杯（8～11），壺の把手，砥石（12）などが，また，柱穴からは壺（3）がそれぞれあげられる。壺（2）は2次住居址内及び柱穴の両方から出土している。1次住居址床面上から出土した遺物はいずれも小片で量も少ないが　高杯の口縁部にはしっかりした凹線がみられるなど2次住居址よりも古い要素が認められる。

以上のことから，1次住居址は弥生時代中期後半に，また，2次住居址は中期末葉に比定できる。

竪穴式住居址ＳＢ16は主にＡW35区の南側からＡX35区にかけて位置する。4本の壁溝を検出しており，土手断面の検討から4度の建て替えを想定している(図5，図版5－1)。

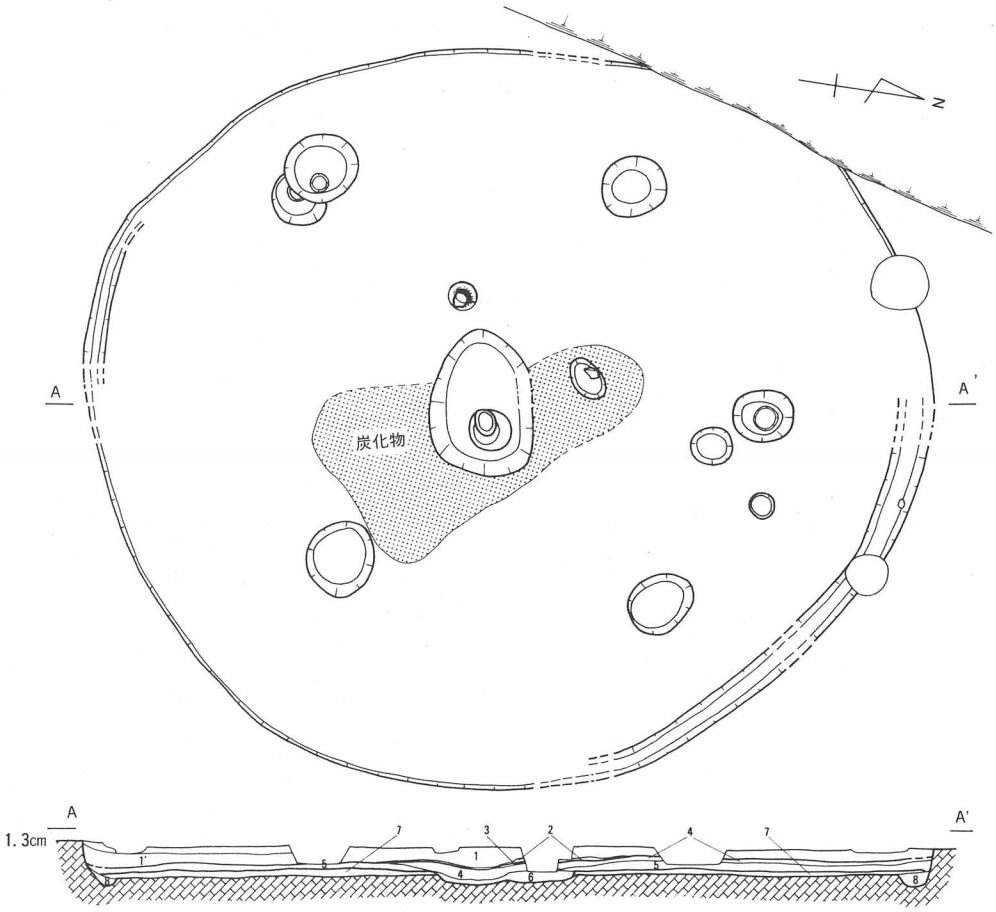


図3　竪穴式住居址SB23　縮尺1／60

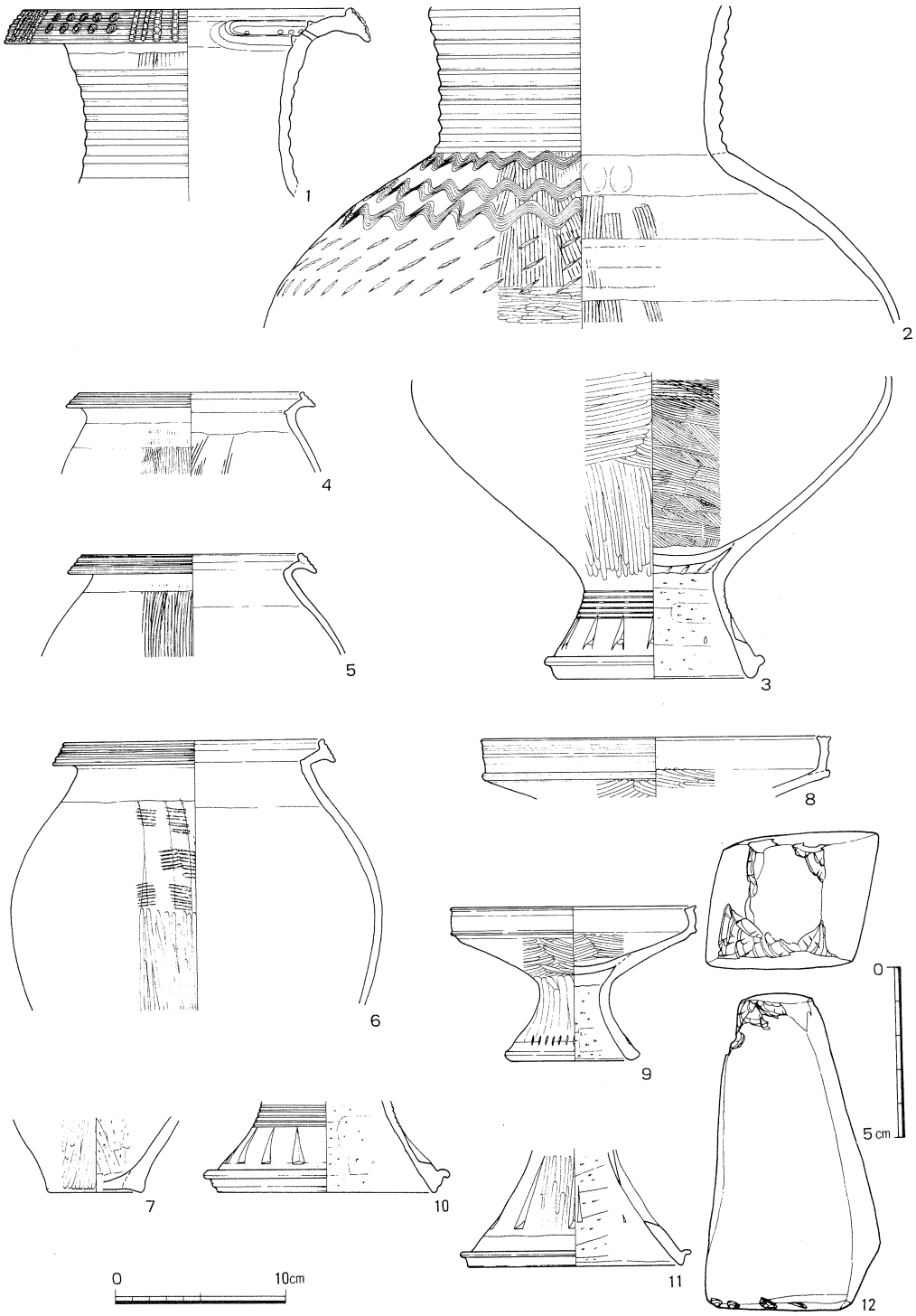
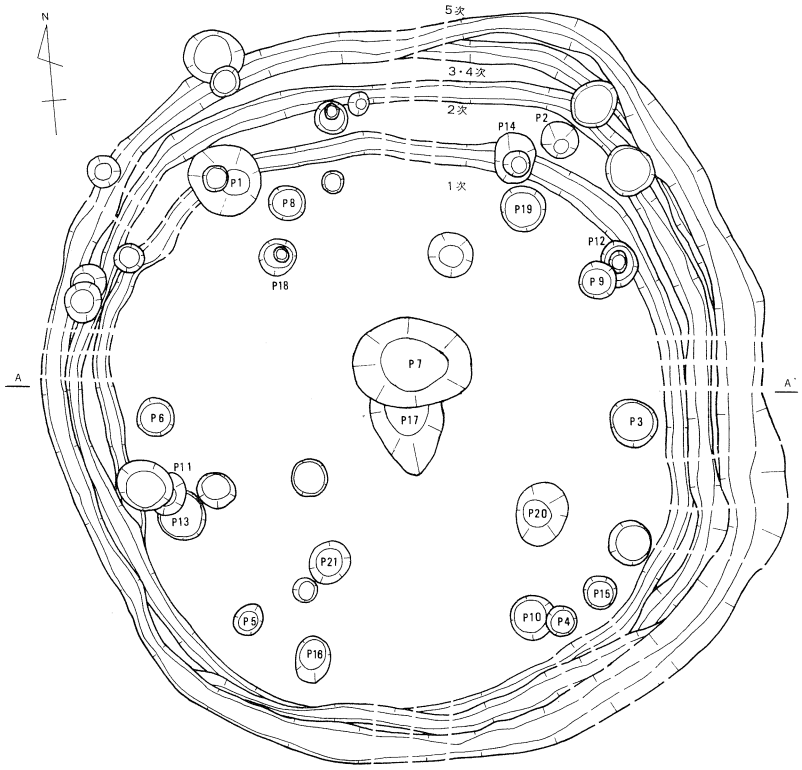
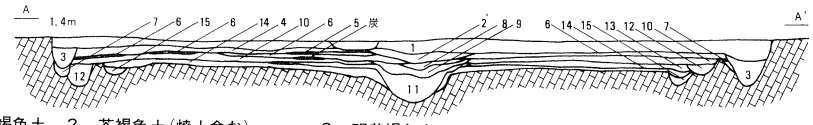


図４　ＳＢ23出土遺物　縮尺１／４，１／２（12）

1次住居址は東西4.8ｍ，南北4.8ｍの円形プランである。P18～21が主柱穴を構成していたとみられ，中央穴は2次住居址の中央穴P17によって削平されている。2次住居址は主に北側に拡張しており，東西約5.2ｍ，南北約5.2ｍの円形プランである。主柱穴は4基でP14～16が相当し，残り1基は5次住居址の柱穴P1の位置に存在したとみられる。中央には埋土に炭を多量に含む深さ約30cmの中央穴P17がある。3次住居址も主に北側が拡張され，東西5.8ｍ，南北5.6ｍの円形プランを呈する。P10～13を主柱穴とする4本柱の住居址であり，土手断面の観察から，5次住居址の中央穴P7にほぼ重なった位置に焼土を多量に含む深さ15cm程度の中央穴を伴うことが認められる。4次住居址は壁溝と4基の柱穴のうちの2基（P8・10）を





1　淡茶褐色土　2　茶褐色土(焼土含む)　3　明黄褐色土
4　暗茶褐色土　5　暗茶褐色土(炭・焼土含む)　6　黄褐色土
7　茶褐色土　8　暗茶褐色土(炭・焼土含む)　9　赤褐色土(炭・焼土含む)
10　淡黄褐色土　11　暗茶褐色土(炭含む)　12　明茶褐色土
13　灰褐色土　14　明黄褐色土　15　暗茶褐色土

0　2m

図5　竪穴式住居址SB16　縮尺1／60

３次住居址と共有する。他の２基の柱穴Ｐ９・11は３次住居址の柱穴を切っており，全体の柱穴の配置は３次住居址とほぼ同じである。本住居址の床面は３次住居址の床面上に一部黄褐色土（６層）を貼り床したもので，住居中央部の床面上には焼土及び炭が堆積している。５次住居址は若干拡張し，東西約６ｍ，南北約６ｍの不整円形プランを呈している。主柱穴は従来の４基から６基へと変化し，Ｐ１～６が相当する。中央には中央穴Ｐ７があり，焼土のブロックを多量に含んでいる。このＳＢ16は基本的に建て替えによって拡張しており，最小の１次住居址の推定床面積は約18.7㎡，最大の５次住居址では約28.5㎡である。

本住居址からは最終の５次住居址に伴い，弥生時代後期後葉の遺物が比較的まとまって出土している（図６－３～12)。また２次住居址の中央穴Ｐ17からは弥生時代後期中葉の甕（２）が出土している。本住居址からは弥生時代後期中葉を遡る遺物は認められないことから，本住居址は弥生時代後期中葉から後葉にかけて営まれたとみられる。

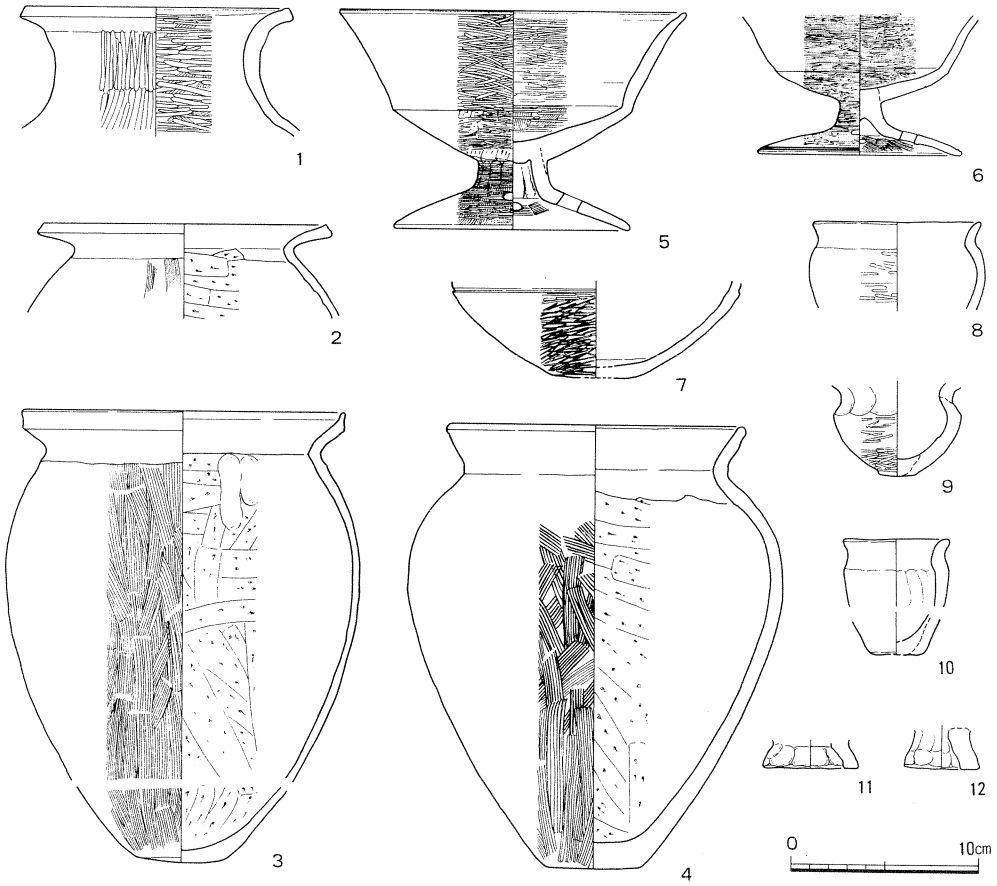
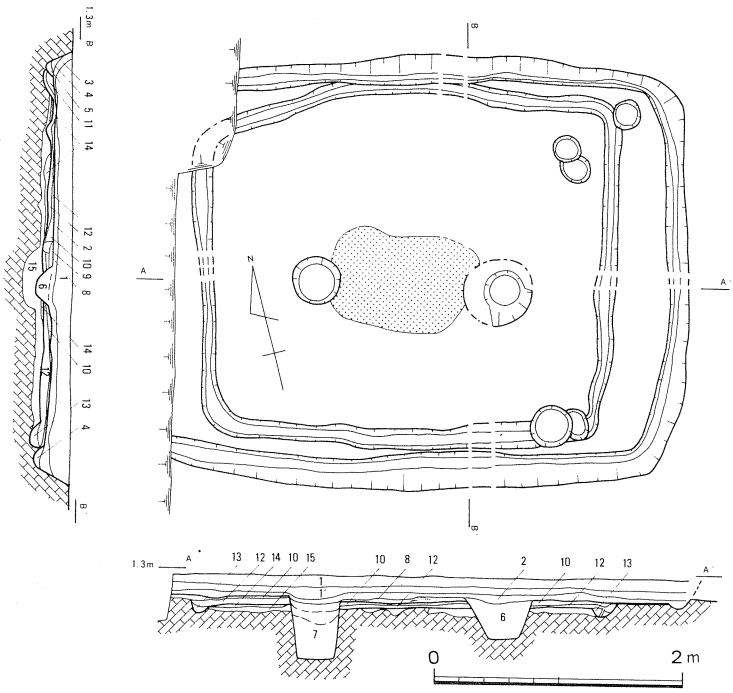


図６　ＳＢ16出土遺物　縮尺１／４



1　黄褐色土　炭・焼土・土器含
1'　暗灰褐色土　炭・焼土・土器含、地山粒含
2　灰褐色土　炭・焼土・土器含
3　灰褐色土　炭・焼土多含
4　黄褐色土　炭・焼土少含、地山粒含
5　茶褐色土　炭・焼土少含
6　灰褐色土　炭多含、焼土含（ｐｉｔ内埋土）
7　灰褐色細砂土～黄褐色土　炭多含、焼土・土器含（ｐｉｔ内埋土）
8　炭層　灰褐色粘土含
9　灰褐色土　炭・焼土多含、土器・地山粒含
10　明黄褐色土　炭・焼土少含（貼床）
11　灰褐色砂質土　炭・焼土若干含
12　暗灰褐色土　炭・焼土・土器含
13　明黄褐色土　炭・焼土少含、地山粒含
14　明黄褐色土　炭・焼土少含、地山粒多含（貼床）
15　黄褐色砂質土　炭・焼土含

図７　竪穴式住居址ＳＢ24　縮尺１／60

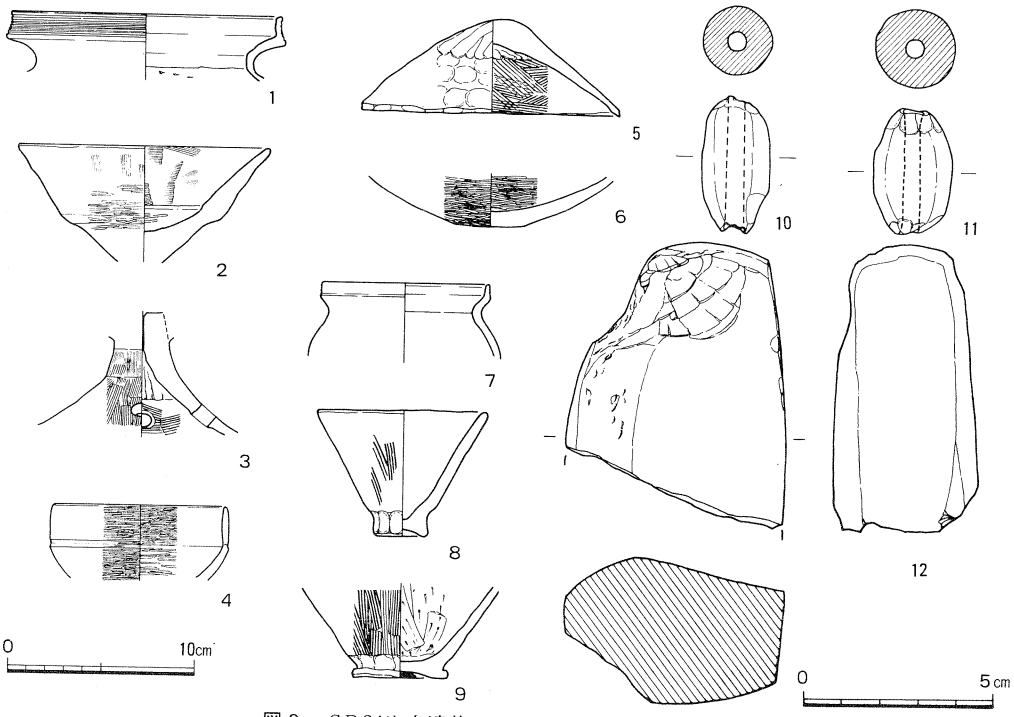


図８　ＳＢ24出土遺物　縮尺１／４，１／２（12）

竪穴式住居址ＳＢ24はＡＷ31区に位置する長方形の住居址で，北側に重複関係をもつ円形住居址の壁溝を切って構築されている。２枚の床面が検出されたことから１度の建て替えが考えられる（図７，図版５－２）。

１次住居址は東西3.4ｍ，南北3.0ｍの長方形に廻る壁溝と柱間1.6ｍの間隔で並ぶ柱穴２本とを有する。床面の標高は0.9ｍ前後で西及び北半部にのみ貼り床がなされ，南に向って緩く傾斜する。床面積は10.3㎡である。

２次住居址の壁溝は，西側を建物によって切断され正確な数値は得られないが，東西4.2ｍ以上，南北3.4ｍを測る。柱穴は１次住居址の２本を踏襲する。床面レベルは標高1.1ｍ前後で全面に厚さ２～３㎝の貼り床がなされる。また，床面中央部，特に柱穴の間から柱穴内にかけては厚いところで５㎝に及ぶ多量の炭化物の集積をみる。薄層理状をなし，粘土をレンズ状に包含する。

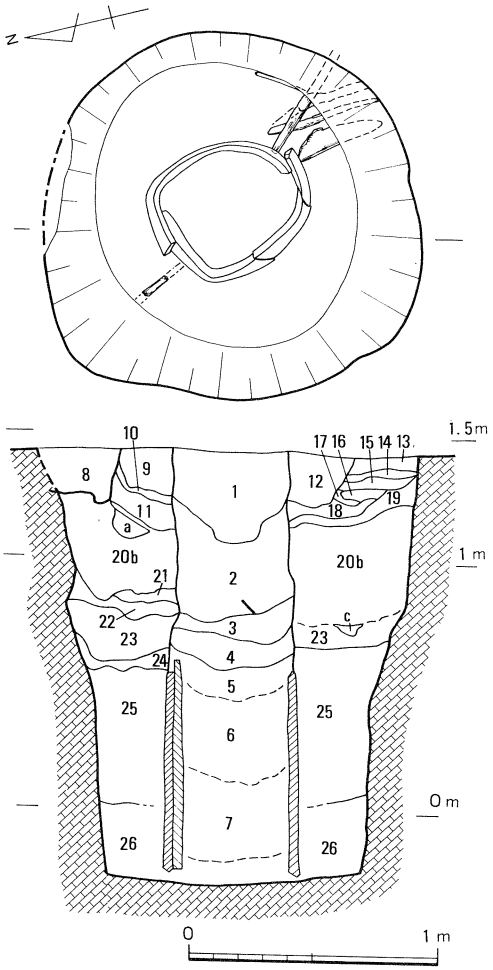
遺物は二重口縁の壺，甕（図８－１・９），高杯（２～４），鉢（６～８），蓋（５）などの他に土錘（10・11）３点，砥石（12）１点，鉄器１点が出土している。２次床面上で検出した蓋（５）は胎土に雲母を多量に含み，茶褐色を呈する。搬入品と考えられる。

以上の出土遺物間に時期差は認めがたく，全体として古墳時代初頭の時期が想定される。

2）井戸

本年度は合計24基の井戸を調査した。平安時代末から中世にかけてのものが５基，弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけてのものが19基である。

前者の５基のうち１基からは白磁椀の完形品及びその底部からは曲物が出土している。また，他には井戸の上層中において馬の頭骨・四肢骨などを検出したものが注目される。大勢は昨年度に調査済みの井戸と同じ状況である。



1 茶褐色微砂粘土
2 暗茶褐色微砂粘土
3 暗黄褐色微砂粘土
4 (暗)黒灰色粘土
5 暗黄灰色粘土
6 暗灰～灰黒色粘土
7 灰黒色粘土
8 暗茶褐色微砂土
9 暗黄褐色微砂土
10 暗茶褐色微砂土
11 茶褐色微砂土
12 茶褐色微砂土
13 暗茶褐色微砂土
14 暗黄褐色微砂粘土
15 暗黄褐色微砂土
16 暗灰褐色微砂粘土
17 黄白色粘土
18 暗黄色粘土
19 暗茶褐色微砂粘土
20b 暗黄褐色微砂土（a・cは砂）
21 黄褐色粘土
22 黄白色粘土
23 暗灰色粘土
24 暗灰色砂混り粘土
25 暗～黒灰色粘土
26 暗青灰色砂

図９　井戸ＳＥ22　縮尺１／30

一方，後者を時期別に細分してみると次のようになる。中期後半１基・後期前葉０基・後期中葉２基・後期後葉１基・後期末葉７基・古墳時代初頭７基・不明１基である。いずれもすり鉢状に落ちこんだ後，垂直に近い傾斜で細長く掘りぬかれ海抜下の砂層にまで達し，下半は粘土で厚く埋る。その中で注目できるものは後述の井戸25の他に中期の井戸があげられる。この井戸では赤色顔料を多量に含む層，炭層，粘土層などが互層をなし，それらが数回にわたって確認されるなど複雑な堆積状況を示す。また，底部近くでは木質が籠状に検出されている。

以上のような状況の中で，代表的なものとして井戸22・50を，そして，やや特異な状況を示すものとして井戸25をあげて次に説明してみたい。

井戸ＳＥ22はＢＢ28区に位置する。平面形は径1.5ｍの円形，深さは検出面より1.7ｍ，標高－0.3ｍを測る。底部は径１ｍ前後の円形を呈し，傾斜角度80°で立上る。中央に２枚のくり貫き材を組合せた井筒が設置されている。井筒は標高0.5ｍより下位に遺存しているが，断面観察によると井筒内埋土と裏ごめ土が遺構検出面である標高1.4ｍまで認められることから，

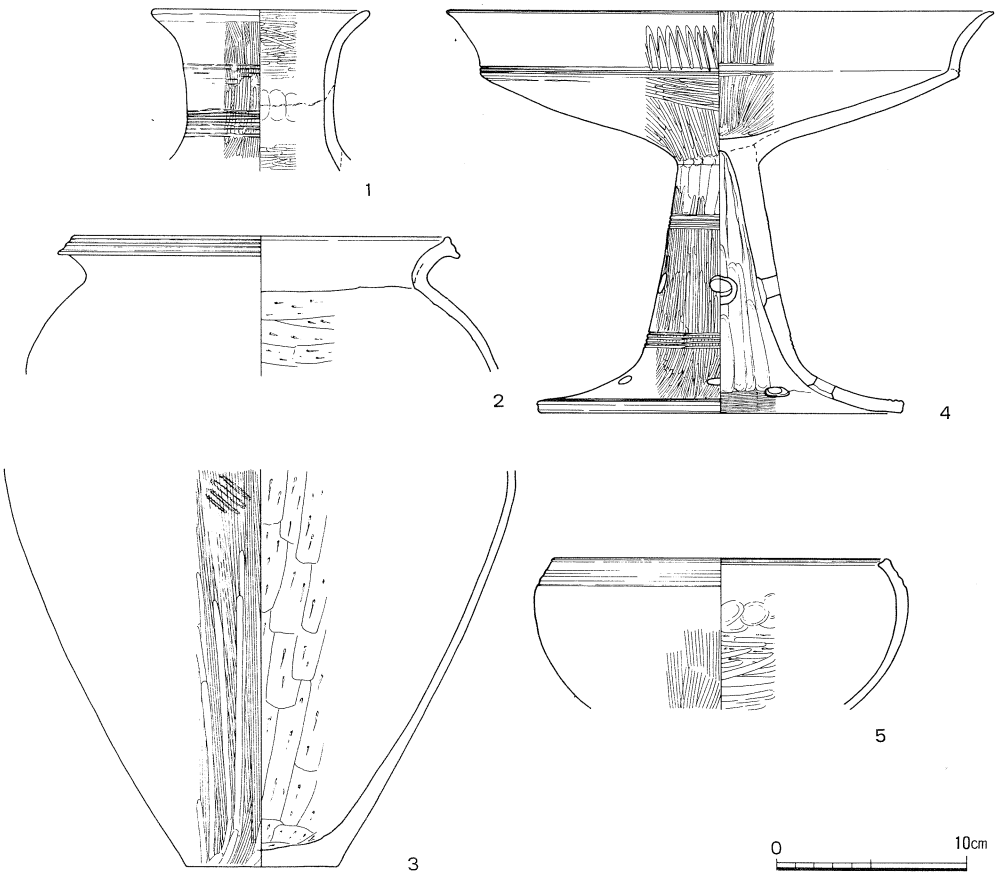


図10　SE22出土遺物　縮尺１／４

本来の井筒長は1.7ｍ以上あったものと推定される（図９，図版６）。

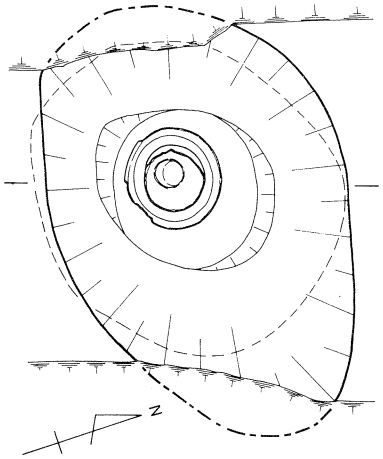
井筒内埋土は３群に分離される。第１～５層は第Ⅴ層起源の土塊を含み，人為的な埋土と考えられる。第６・７層は炭化物，腐植物，土器片，木片が多出し，生活にともなう不用物が一定期間にわたり廃棄されたものと考えられる。最下位の第26層は第Ⅶ層起源とみられる細・粗砂からなる。裏ごめ埋土は３群に分離される。第９～19層は少量の土器片，炭化物を含む第Ⅴ・Ⅵ層起源の土塊よりなる。第20～25層は第Ⅶ層起源の砂質土塊を多く含み，第26層は少量の粘土塊を含む第Ⅶ層起源の砂質土層である。

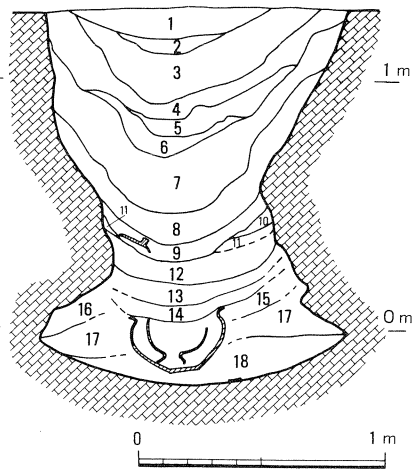
井筒は径約60cmで厚さは３～４cmを測る。内外面とも風化が進んでいる。井筒底面は内外面からの削りによって尖っている。また底面より約20cm上方に長方形の透しが各２つづつ穿たれている。

遺物は井筒内埋土第１～７層と裏ごめ土第９～19層中より出土している（図10）。土器は２時期に大別され，弥生時代中期末葉の壺，高杯，甕，鉢（５）と弥生時代後期中葉の壺（１），甕（２・３），高杯（４）がある。前者は後世の流れ込みであり，本遺構は弥生時代後期中葉の所産と考えられる。

井戸ＳＥ25はＢＡ30区と31区の境に位置する。平面形は上面で1.5ｍ×1.2ｍの楕円形を，また，くびれ部では径0.65ｍ前後，底部では径1.2～1.3ｍの円形を呈する。上面から60～65°の角度で落ちこみ，標高0.5ｍ付近で垂直に変換した後，袋状に広がり標高－0.2ｍで底に至る。検出面からの深さは1.5ｍである（図11，図版７）。

遺構内の堆積状況は上部から第１～４層の自然流入土，第５～８層の炭・焼土層，第９～12層の有機物層，第13～18層の粘土層の４つに大別することができる。有機物層はくびれ部に堆積しており，その上面には，薄皮状の木片が全面を厚く覆っている。また，壁際には棒状の木材が数本検出され，斜めに組合せながら袋状の広がりを持つ部分に向けて打ちこまれた状況が認められたが，残存状態が非常に悪





1	灰褐色土	7	黄褐色粘質土	13	暗灰色粘土
2	灰褐色土	8	灰色粘質土	14	淡灰色粘土
3	茶褐色土	9	暗灰色粘土	15	暗灰色粘土
4	茶褐色粘質土	10	青灰色粘土	16	暗青灰色粘土
5	茶褐色粘質土	11	黒灰色粘土	17	暗褐色粘土
6	黄白色粘質土	12	暗灰色粘土	18	暗青灰色粘土

図11　井戸ＳＥ25　縮尺１／30

く図化及び取上げも不可能であった。木片の下には多くの炭化木が堆積し，さらに木器が炭化木に続いて検出された。この木器の機能は不明であるが，ほぞ穴を持ち２つの木材の組合せの状態が認められた。粘土層はいずれも炭・種子などを若干含むだけの汚れの少ない粘土であるが，その中には袋状部の奥から出土したガラス滓なども含む。

出土遺物としては前述した木器の他に甕（図12－１），大鉢（４），高杯（２・３），石錘（５）等がある。大鉢はほぼ完形で，底部中央部に置かれ，その中には甕（１）が伏せられて出土している。大鉢の口縁周辺には丹の散布が少しみられる。全体として，古墳時代初頭の時期が想定できる。

ＳＥ25は形状・土層の堆積状況・遺物の出土状態など他の井戸に比べてかなり多くの点で異なる。こうしたことからその性格についてはいくつかの疑問点があげられるが，ここではとりあえず井戸状遺構として今後の検討を待つことにする。

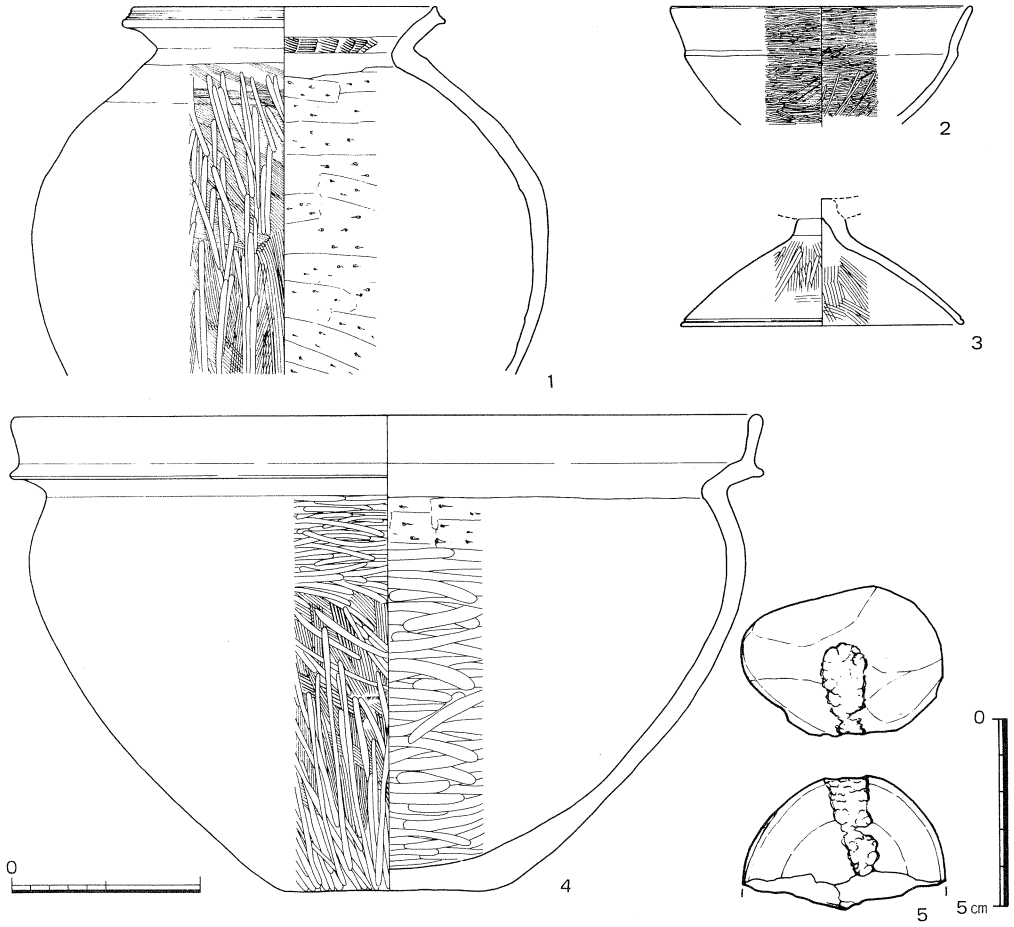


図12　SE25出土遺物　縮尺１／４，１／２（５）

井戸ＳＥ50はＡＹ35区の中央付近に位置する。北端が試掘トレンチによって一部削平されているが，現状で東西径約1.4ｍ，南北径約1.3ｍを測る円形プランの素掘り井戸である（図13，図版８）。掘形は上端部がやや開き気味の円筒形をなしており，検出面からの深さは約３ｍで，底の標高は約－1.9ｍ前後である。

井戸内埋土は大きく８層に分かれる。第１・２層には炭化物は少量混入するにすぎない。第３層中には炭化物が層状に堆積している。第４～６層には炭化物は僅かであるが，第７層は炭化物を多量に含み，炭化物の層状堆積も存在する。また第７層には木片などの未分解の有機物も含まれ，最下面には未分解の有機物が薄層となって堆積している。最下層の第８層は２ｍ前後の厚さがあるが，炭・焼土などの混入物が少ない均質な粘土層である。

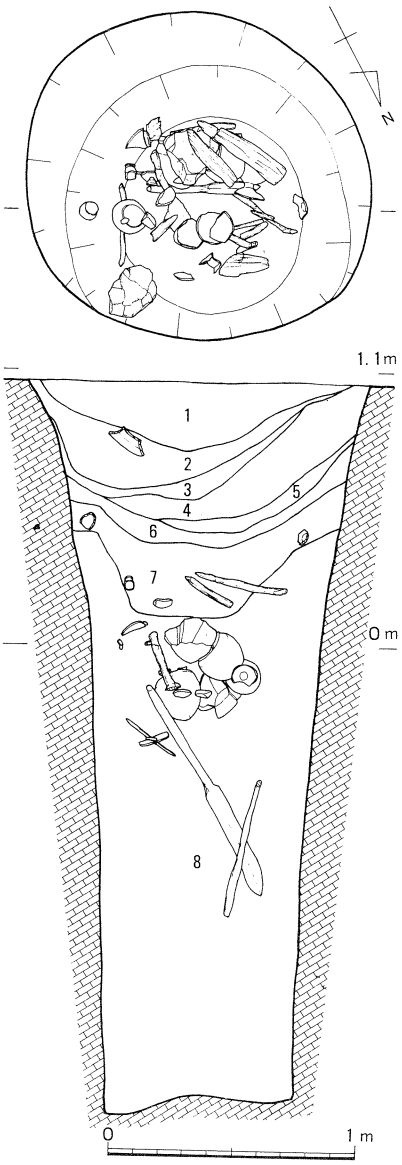
遺物は第１～７層中にも散在するが，第８層の上位から中位にかけて，ほぼ完形の土器や木製品がまとまって出土している。

本井戸からの出土土器には壺（図14－１・２），甕（３），高杯（４・５），鉢（８・９），脚台部（10）などの他，手づくね土器（７），手焙形土器（６）などがある。石器には有溝石錘の破片（11）が１点出土している。この他図示していないが，櫂状の木製品も出土している。出土土器から本井戸は古墳時代初頭に位置づけられる。

3）溝

本年度調査した溝は古代・中世と弥生時代から古墳時代にかけてのものである。

中世の溝はＡＺ・ＢＡ区の38ライン上に南北に走るＳＤ４とＢＣ29～34区において東西に走るＳＤ16とがある。ＳＤ４のＡＹ区以北の部分については昨年度に調査済みで，状況は今回も同じである。ＳＤ16は幅50cm，深さ40cm，検出長22.5ｍを測る。ＳＤ４とほぼ同時期の遺物が出土している。古代の溝ＳＤ70は幅120cm，深さ30cm前後を測り，ＢＣ31・32区に位置する。ＢＣ31区ではＳＤ16の下部に重複する形で東西に走り32区に入ると直



1　暗灰褐色土　2　茶褐色土　3　暗茶褐色土 炭を含む　4　黄灰褐色土　5　灰褐色粘質土　6　淡灰色粘質土　7　灰色粘質土 炭を含み、最下部に未分解有機物を含む　8　灰色粘土

図13　井戸SE50　縮尺１／30

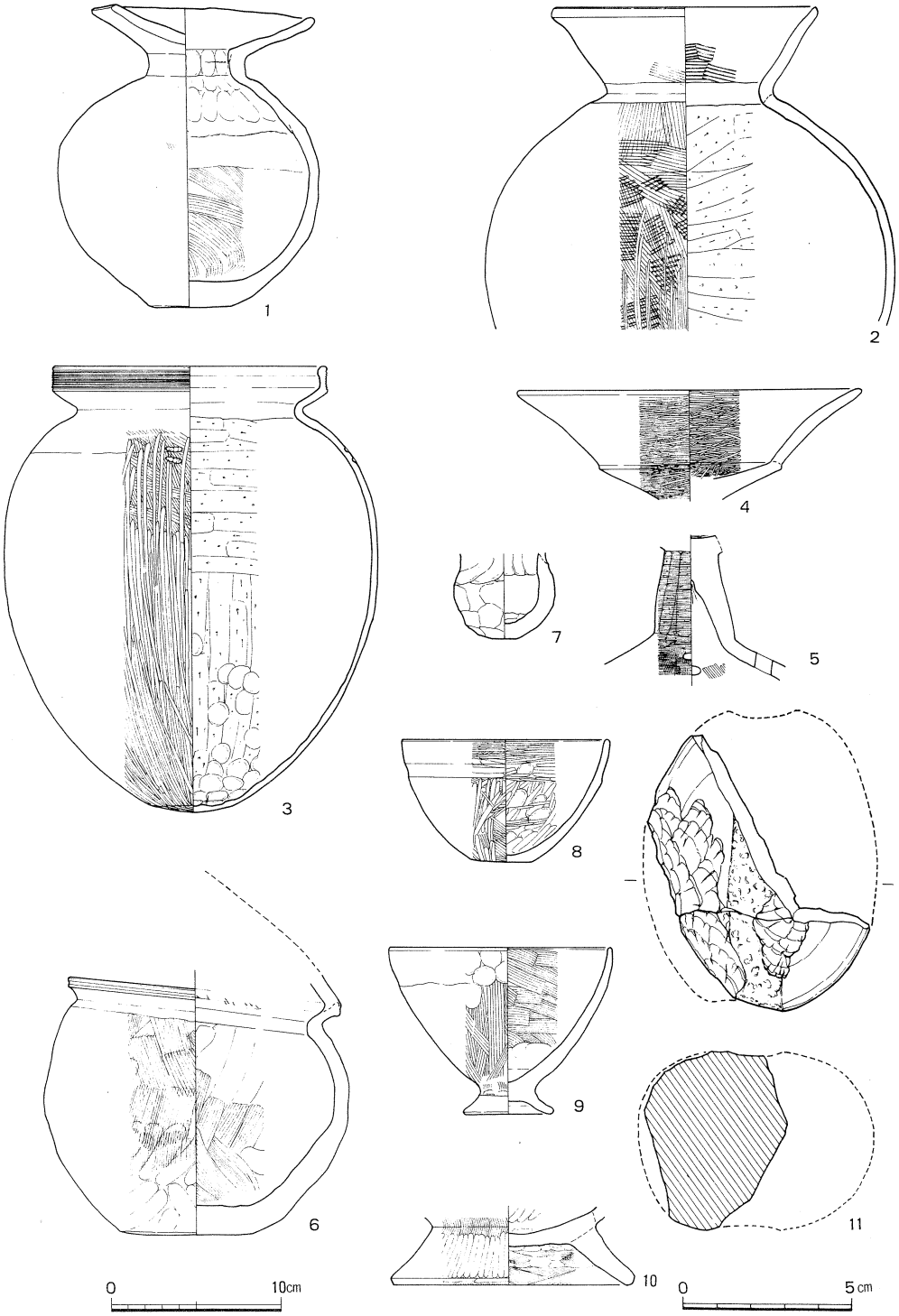


図14　SE50出土遺物　縮尺1／4，1／2（11）

角に向きを変えて北に向う。時期は溝上部から出土した遺物から８～９世紀が想定される。

弥生時代から古墳時代初頭に属するとみられる溝は，概算ではあるが，63条を数える。大多数の溝は幅10～20㎝前後，検出面からの深さ３～10㎝程度であり，長さは２～５ｍ程度の比較的短いものが一般的である。その中で，溝ＳＤ37は調査区西側を東北方向から西南方向に縦断し，総延長は30ｍを越えている。幅は50～70㎝，深さ30～70㎝を測り，本調査区では最も規模の大きい溝である。溝の時期は溝内出土遺物から弥生時代後期中葉前後かと思われるが，当時の集落における役割は現段階では明確ではない。

4） 土壙

弥生時代から古墳時代初頭に属するとみられる土壙は，概算で約340基を数える。土壙については現在充分な分析をなし得ておらず，多くの時期・性格等は現段階では不明であり，集落における土壙の在り方も未検討である。現状で特徴ある土壙をあげると，後述する土壙ＳＫ122のように製塩土器をまとめて廃棄した土壙２基，ガラス滓を出土した土壙４基などの他に，長方形掘形をもち，土壙墓と思われるものなどがある。

土壙ＳＫ122はＡＸ34区の東南部に位置するが，古代の井戸によって一部破壊されており，南半部を残すのみである（図15，図版９）。残存部の形状から本来は楕円形プランであったと思われる。現状では最大長約90㎝，最大幅約60㎝を測り，検出面からの深さは約25㎝である。埋土は５層に分かれるが，いずれも東南側から西北側に向って傾斜している。第２層の下位からは投棄された製塩土器の破片がまとまって出

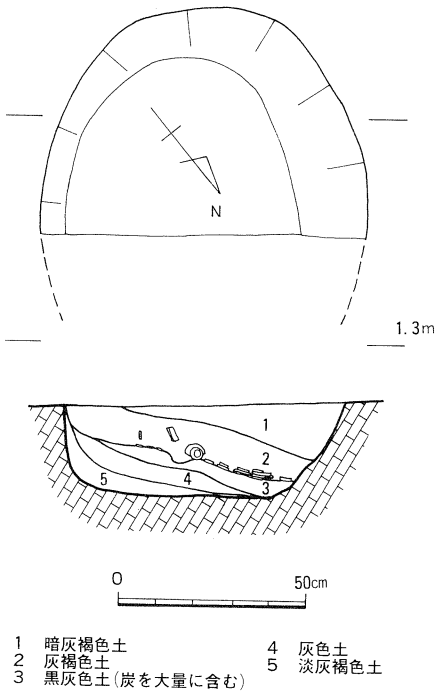


図15 土壙ＳＫ122 縮尺１／20

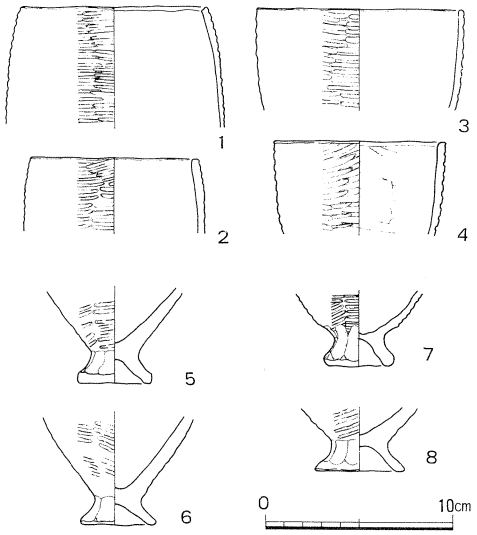


図16 ＳＫ122出土遺物 縮尺１／４

土している。また第３層と第４層の下部には廃棄された炭化物が大量に含まれており，土器製塩にともなったものと思われる。

本土壙の出土土器は表面に叩きをもつ製塩土器のみで，いずれも火を受け小片となっている（図16）。脚部は図示した４点のみで，製塩土器の総重量は1.75kgである。本土壙は古墳時代初頭に位置づけられる。

5） 土器棺

本調査区内では埋葬施設として４基の土器棺を検出した。

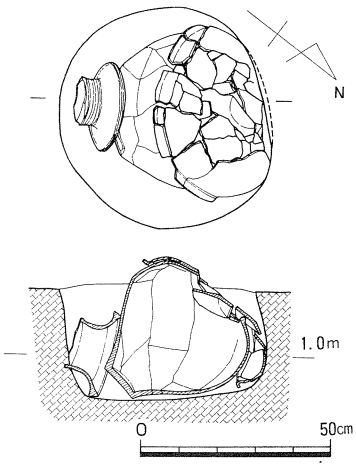


図17　土器棺SK1　縮尺１／20

土器棺ＳＫ１はＢＢ30区に位置し，標高1.2ｍで土壙掘形を確認した（図17，図版10）。土壙は東西55㎝，南北60㎝の不整円形を呈し，深さは約30㎝を測る。床面はほぼ平担であり，80°前後で立ち上がるが，北西側の壁はややせり出している。棺は頸部を除去した壺を身とし，鉢を蓋としている。北西－南東方向に主軸をとり，傾いた状態で設置している。また土壙内の南東隅に除去した壺の頸部を置いている。なお検出段階では蓋の一部が破砕・陥没していた。棺内埋土は５層に分離され，上半部は陥没後の流入土であり，下半部は陥没以前の風化物と浸入泥の堆積と判断された。最下層より乳歯とみられるエナメル質の小片が10数点出土した。[注2] ＳＫ１は弥生時代後期中葉のものである（図18）。土器棺ＳＫ２・４は弥生時代後期前葉，土器棺ＳＫ３は弥生時代後期中葉にそれぞれ位置づけられるものである。

6） その他の遺構

以上の他に調査した遺構としては多数のピット，炉，土器溜りなどがある。ピットには柱痕を残すものも多くみられ，掘立柱建物等の存在が推定されているが，重複が多く復原は困難である。炉はＡＺ30区で検出したもので，規模は径約50㎝，残存高約30㎝を測る。焼土，炭化物とともにガラス滓が出土している。土器溜りは４地点で検出した。いずれも弥生時代後期末葉から古墳時代初頭のものである。

4　小結

本調査区における弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけての集落の動きを住居址と井戸から概観してみたい（図19）。

まず，中期後半において調査区内南東部（以下「調査区内」を省く）に住居址３棟・井戸１基が出現する。１棟は円形の大形住居址であるが，他は中・小形の隅丸方形を呈する。後期前葉には遺構は減少し住居址１棟が残るのみである。中葉になると住居址６棟・井戸２基が出現し，

前葉に比べて住居址が急増する。また，東部に４棟，西北部に２棟と，新たに西北部への構築が始まる。井戸については，出土遺物間に若干の時期差が認められ，同時併存かは不明である。後期後葉には住居址６棟のうち３棟までが中葉から連続して設けられており，その数・位置関

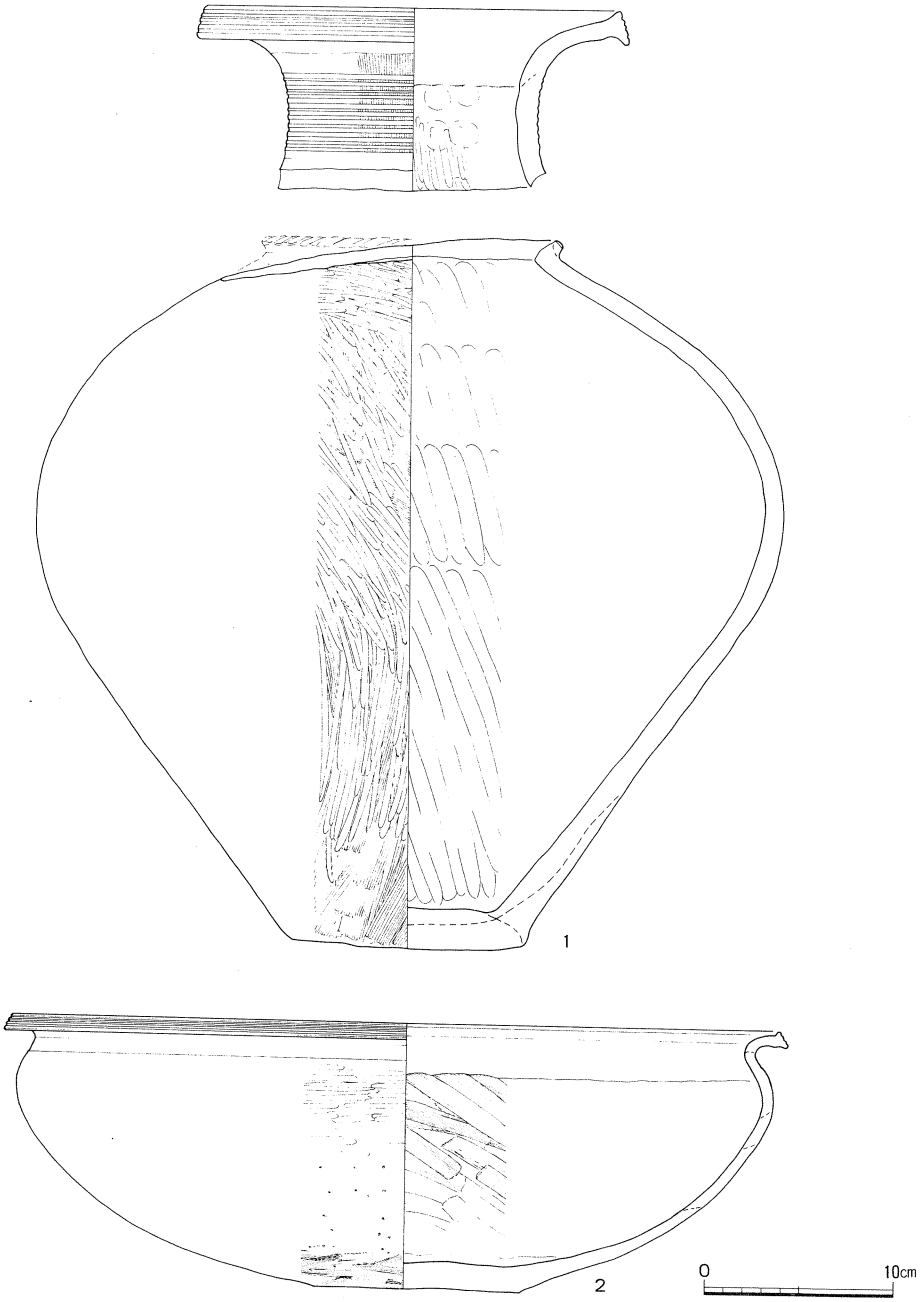


図18　SK１出土遺物　縮尺１／４

係は基本的に変化しない。住居址の規模はこれまで徐々に大形化していたが，この時期に最大となる。一方，井戸は１基のみである。後期末葉の住居址は11棟検出されているが，重複関係があり，同時併存は７棟までと考えられる。東部に４棟，西北部に３棟であり，東西の住居址数の割合に大きな変化はない。東部の４棟はいずれもより北へ移動している。また，この時期から住居址の小形化が認められる。その傾向は短期間での建て替えと次段階に続く小形方形住居址の出現に関係する可能性を指摘しておきたい。一方，井戸は増加し７基を数える。特に，これまで存在していなかった西部への進出が目立つ。古墳時代初頭になると住居址はすべて新たに建て替えられるが，数及び東西での割合は変化していない。ただし，東部においては前段階に引き続き北側への移動の傾向がある。一方，井戸は７基で変化はないが，南側へ移動している。

このように，本調査区内では中期後半に住居群が形成され，その後一旦減少するものの，後期中葉には東部に４棟・西部に２棟の住居址が定着する。それらは一定の関係を保ちつつ古墳時代初頭にまで継続する。井戸は後期末葉以降は住居址と同数まで増加し，古墳時代初頭には住居址群から離れて全体に位置を南側に移動している。　（栄　一郎，山本悦世，吉留秀敏）

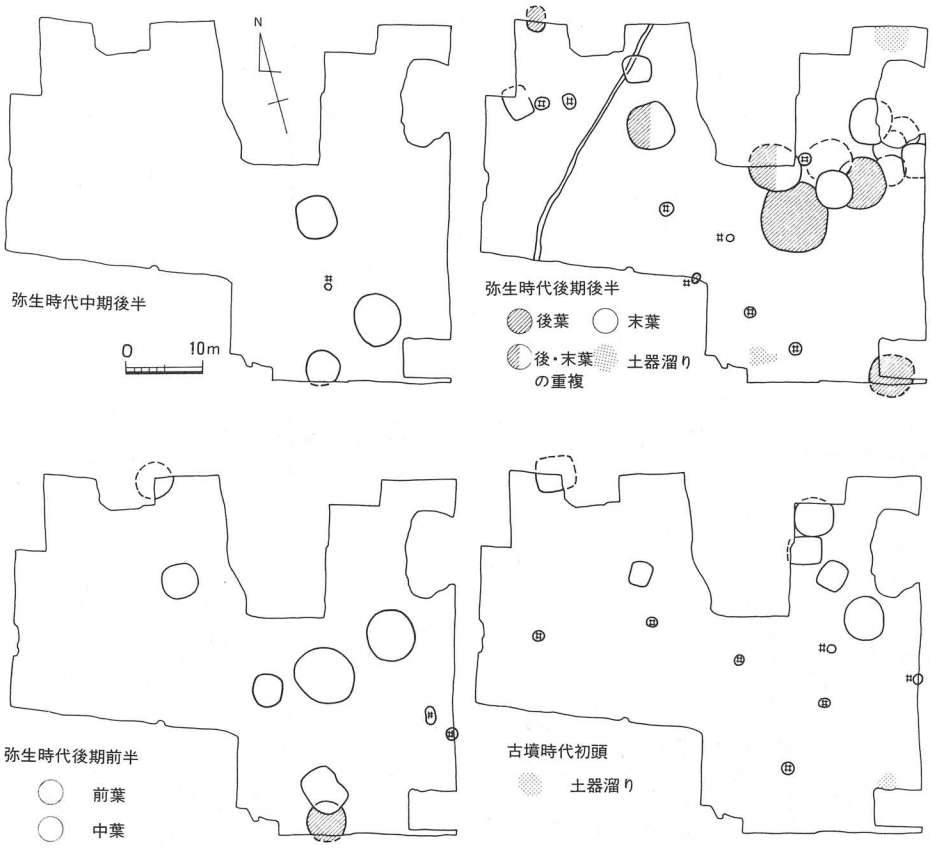


図19　弥生～古墳時代主要遺構変遷模式図　縮尺１／1000

第３章　昭和59年度岡山大学構内の試掘・立合調査報告

昭和59年度に岡山大学構内で実施した試掘・立合調査について報告する。試掘調査は２件実施し，調査面積は約20㎡であった。立合調査は建物等新・改築にともなうものが４件，諸配管関係工事にともなうものが11件，駐車場の整備にともなうものが３件，その他１件であった。以上の調査結果を津島地区と鹿田地区にわけて説明する。

１）　津島地区

津島地区では４件の立合調査を実施した（図20，図版11）。

南宿舎合併処理槽関係排水管埋設予定地では遺構と遺物包含層を確認した（図21）。本地区の層序は以下のように観察された。第１層は明治年間の造成土，第２層は造成以前の水田土壌，第３～４層は古代～近世の水田土壌，第５層は遺物包含層，第６層は津島地区全域で明瞭に観察される黒色土層である。第７層は基盤層であり遺物の出土はない。遺構には溝２条と土壙があり，溝は第２層上面および中面から掘り込まれており，造成以前の農道に沿って設けられていたものと考えられる。土壙は第３層中に検出面をもつものであり，近世のものと考えられる。埋土中から備前焼の小片が１点出土している。第５層とした遺物包含層からは弥生時代

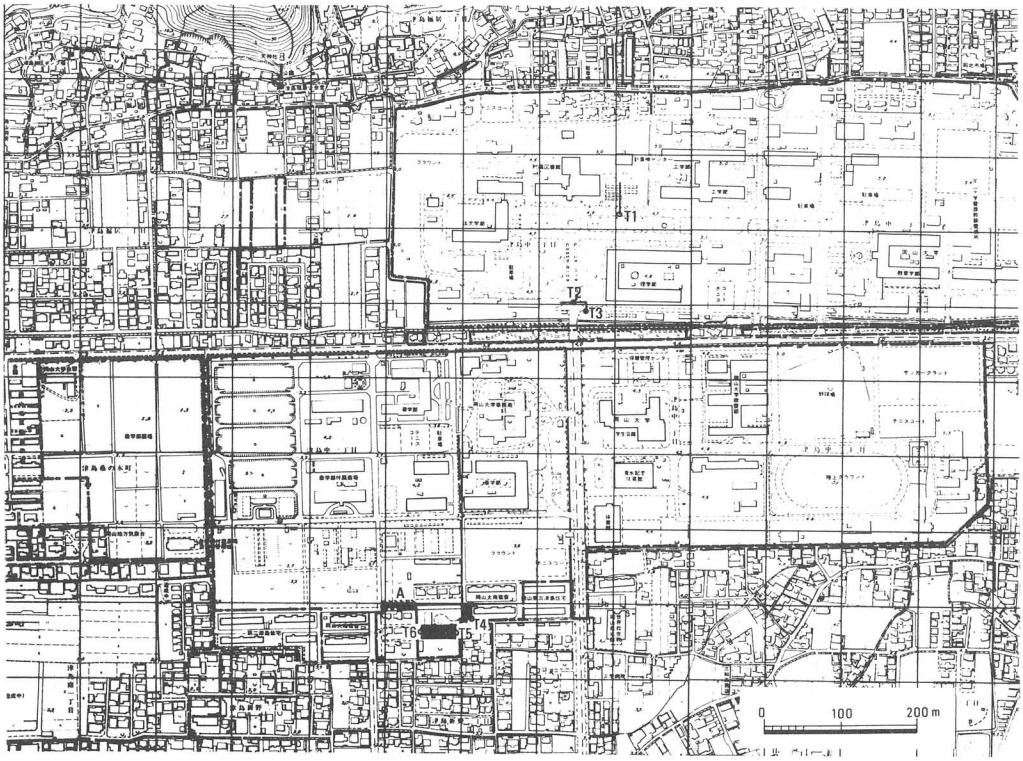


図20　津島地区立合調査地点位置図　縮尺１／10000

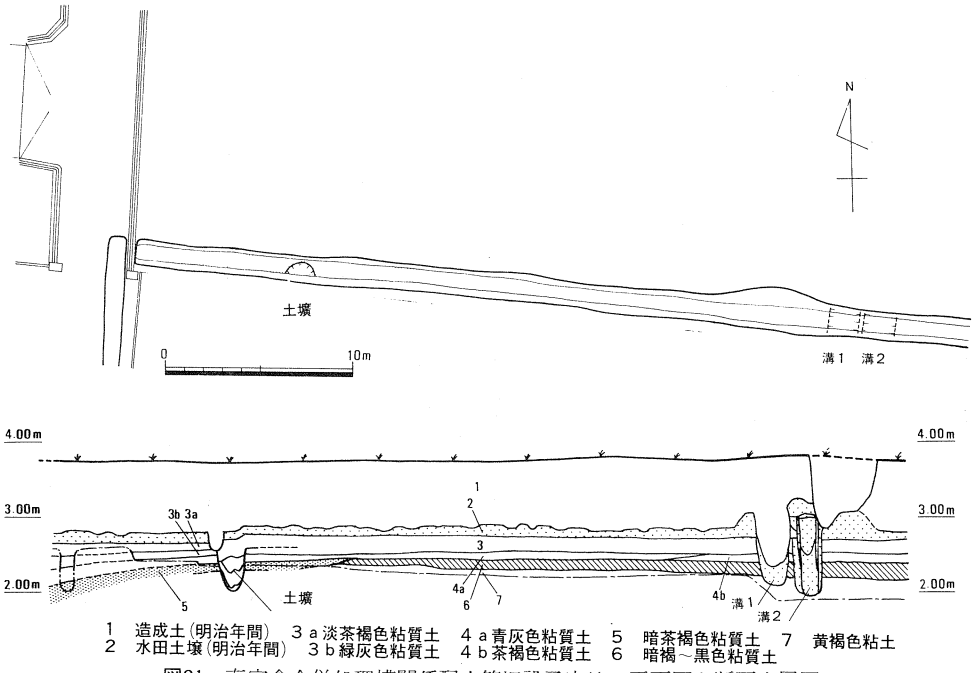


図21 南宿舎合併処理槽関係配水管埋設予定地の平面図と断面土層図
縮尺1／400（断面図縦軸のみ1／100）

前期の土器片とサヌカイト片，古墳時代後期の須恵器片が出土している。すべて微細な破片のために，時期の判断は困難であるが，後者は6世紀前半頃のものと推定される（図22）。なお本地区では第3～5層が西に向って緩く下がる状況が認められる。遺物包含層は微高地の縁辺部に形成されているものと考えられる。

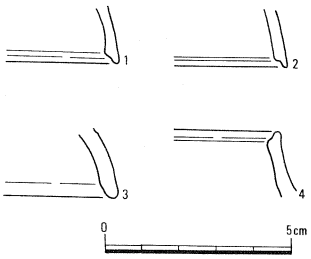


図22 出土遺物 縮尺1／2

その他の津島地区の立合調査では，遺物・遺構の検出はなく，主に土層観察をおこなった（図23）。総合情報処理センター通信用管路埋設予定地（T1～T3）では，第3層まで掘り下げた。第1層の造成土が厚く，全体に粘土化が強い。南宿舎合併処理槽取付予定地（T4）と非常勤講師宿泊施設新営予定地（T5・6）では，おおよそ同様の層序が認められた。第5層の黒色土層上面は地表から比較的浅いところで確認されることから，両地区は微高地上に位置すると判断される。

2） 鹿田地区

鹿田地区では2件の試掘調査と14件の立合調査を実施した（図版1）。

医学部附属病院西病棟北側受水槽工事予定地の試掘調査は，既建設工事などから破壊を免れた包含層の残存状況を確認する目的で実施した。工事予定地に約2×2 mの試掘壙を2ケ所設

け調査を進めた。その結果，予定地全域に保存状況の良好な遺物包含層が認められた(図24)。そのうち一部を１×0.5ｍの範囲で掘り下げた結果，次の堆積状況が観察された。第１層は病院創設時の造成土であり，第２層は造成直前の水田土壌である。第３～６層は灰褐～暗灰褐色粘質土であり，第３層には中世～近世の遺物が認められ，第４層以下には中世を主とする遺物が出土した。なお，鹿田遺跡で使用している基本層序に合わせると，第１層は第Ⅰ層，第２・３層は第Ⅱ層，第４～６層は第Ⅲ層となる。遺物は特に第６層下部に集中して出土した。以下は遺構の破壊を避けるために作業を中止し，埋め戻した。出土遺物には白磁椀（３），瓦質土鍋（４），土師質土鍋（５）などがある。

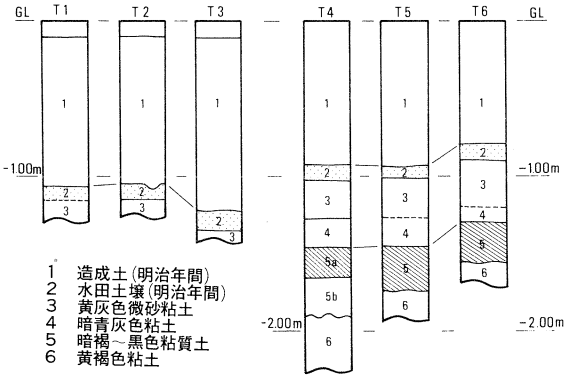


図23　津島地区立合調査地区模式土層柱状図　縮尺１／50

次に立合調査では，14件のうち３件について遺跡範囲等についての新たな知見が得られた。医学部附属病院ＮＭＲ－ＣＴ室新設関係排水施設取付工事では，前年度の発掘調査区の東約20ｍの地点を掘削した。その結果，旧水田層（第Ⅱ層）の下位に遺物包含層が認められた。医学部

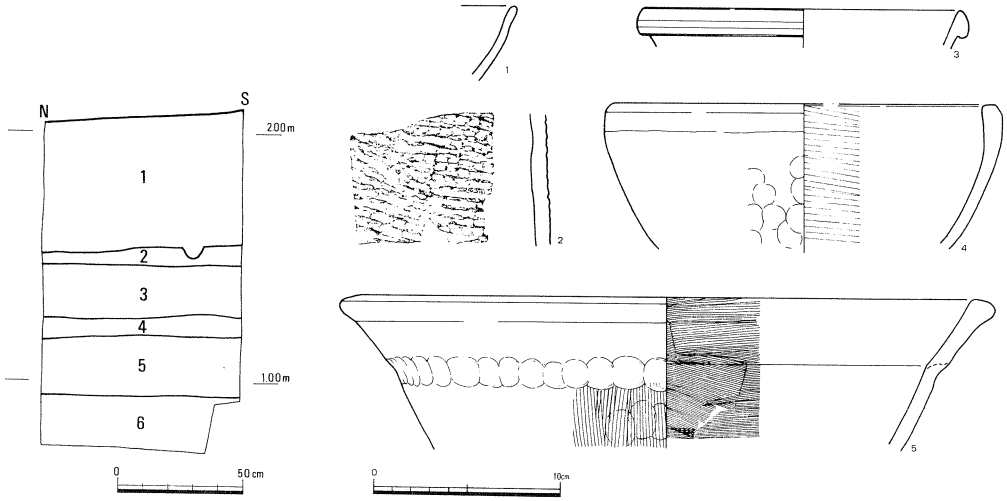


図24　鹿田遺跡BT30区試掘調査地点東側土層断面図と関連の出土遺物　縮尺１／30，１／４

附属病院看護婦宿舎前水道管修繕工事と同外来診療棟関係ガス管引き込み工事では，何れも共同溝沿いの既掘削部分の掘り下げであった。その中で工事掘削範囲内での壁面の観察によって，両者共に周辺に遺物包含層の存在が確認された。前者からは少量であるが中世の土器片を採集した（図24）。その中には土師質高台付椀（１），須恵器系土器（２）などがある。

（吉留秀敏）

第４章　昭和59年度構内遺跡調査のまとめ

昭和59年度までに埋蔵文化財調査室による調査・研究活動によって得られた成果を概括し，今後の課題を提示してまとめとしたい。

まず，鹿田地区では試掘・立合調査の結果，鹿田遺跡の範囲が従来の推定より東側に拡がることが判明した。また昨年度より継続していたＡＵ～ＢＤ28～39区の発掘調査を終了した。昨年度は古墳時代後期から中世に至る集落の一部を明らかにしたが，本年度はさらに先行する弥生時代中期後半から古墳時代初頭の集落の変遷を明らかにすることができた。それによると，住居址等の規模や数に増減がみられるものの，ほぼ連続して集落が営まれていたと考えられる。これらは限られた調査範囲内であり，集落全体の動向をどれだけ反映するか不明であるが，少なくとも弥生時代中期後半以後は比較的安定した環境と生産基盤を備えていたと推定できる。集落出現時期の限定や各時期の動向の検討は，本地域における弥生時代社会の歴史的な動態を把握する手懸かりと考えられるが，今後の整理作業と周辺調査を踏まえて慎重に進めたい。

次に津島地区では，立合調査によって構内の古地形と遺跡の分布について新たな知見を加えることができた。まず農学部構内では，敷地内最南端に位置する微高地の幅とその流走方向が一部明らかになった。つまり昨年度に発掘調査を実施したＢＨ13・14区から略西方向へ向う微高地端部はＢＩ13・16区では現われず，ＢＨ14・15区付近で南方向に大きく向きを変えるものと推定される。また，この微高地はＢＩ17・18区付近で次の低地部に達し，微高地端部付近に新たに弥生時代と古墳時代の遺物包含層が確認された。また，座主川の北側に位置するＡＷ・ＡＸ11区およびＡＺ・ＢＡ12・13区では掘削深度が浅く微高地の存在はなお不明である。今後，周辺の調査の必要が再認識された。

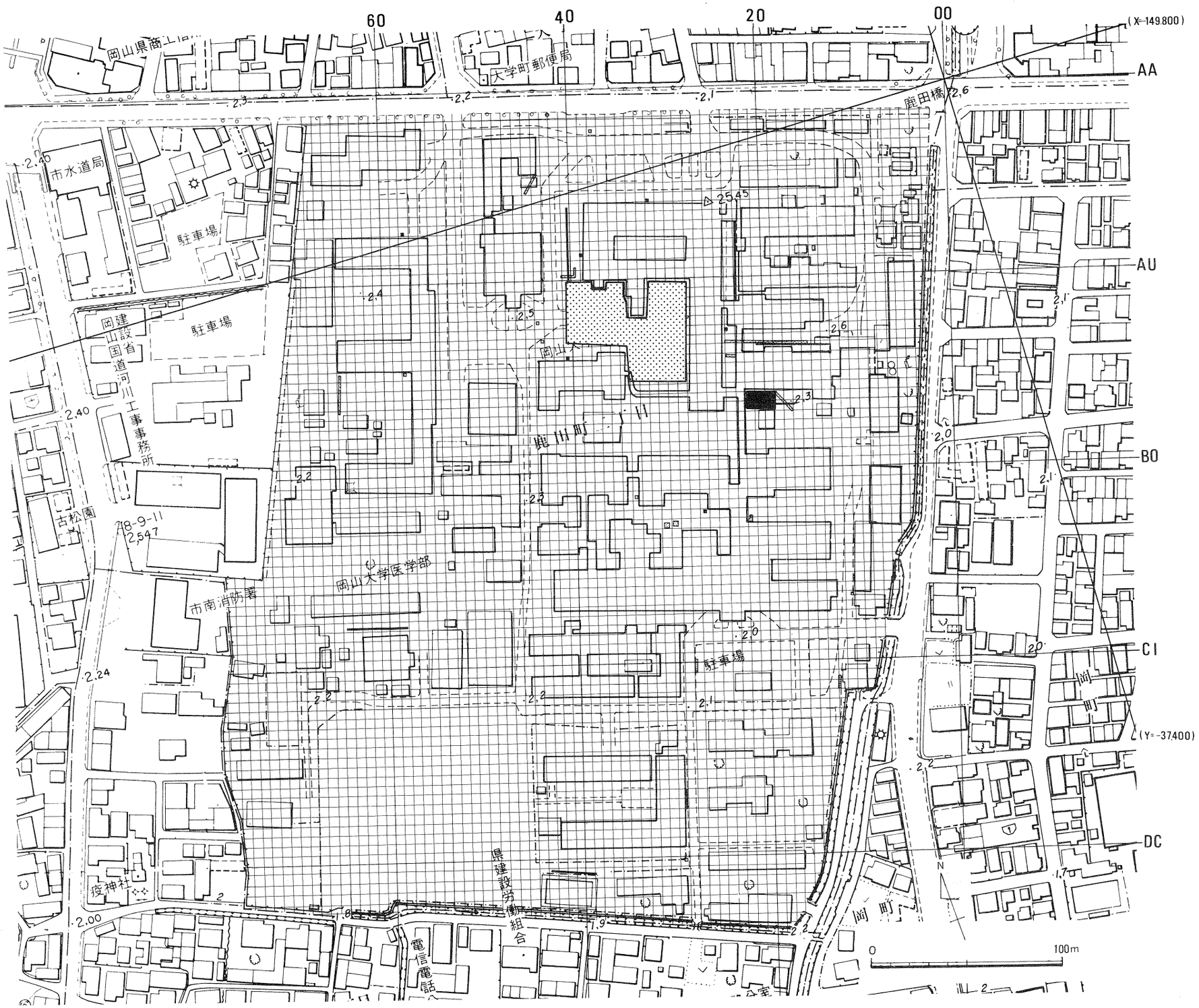
なお，これらの調査活動とともに，学内・学外への普及活動の一環として，昭和59年５月19日にＡＵ～ＢＤ28～39区の発掘調査時における現地説明会を実施した。その結果，80名以上の見学者が訪れ，埋蔵文化財への認識の高さが窺われた。今後も調査・研究とともに，保存・活用を通じての成果の公開を一層進めなければならないと考えられる。

（栄　一郎，山本悦世，吉留秀敏）

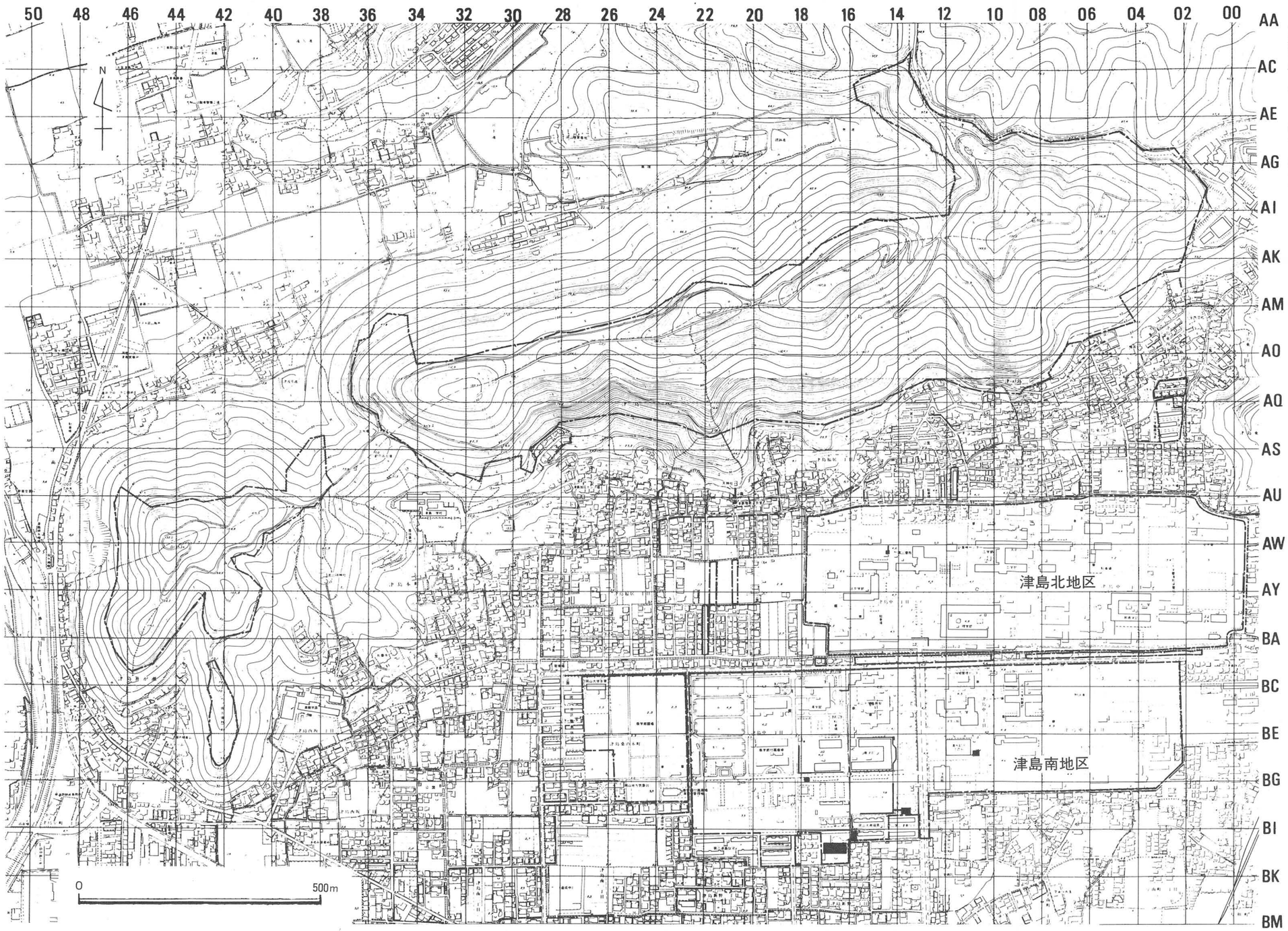
注１　岡山大学埋蔵文化財調査室『岡山大学構内遺跡調査研究年報１』 1985

注２　本学歯学部小田嶋梧郎教授の教示による。資料は現在同教授により分析を進めていただいている。

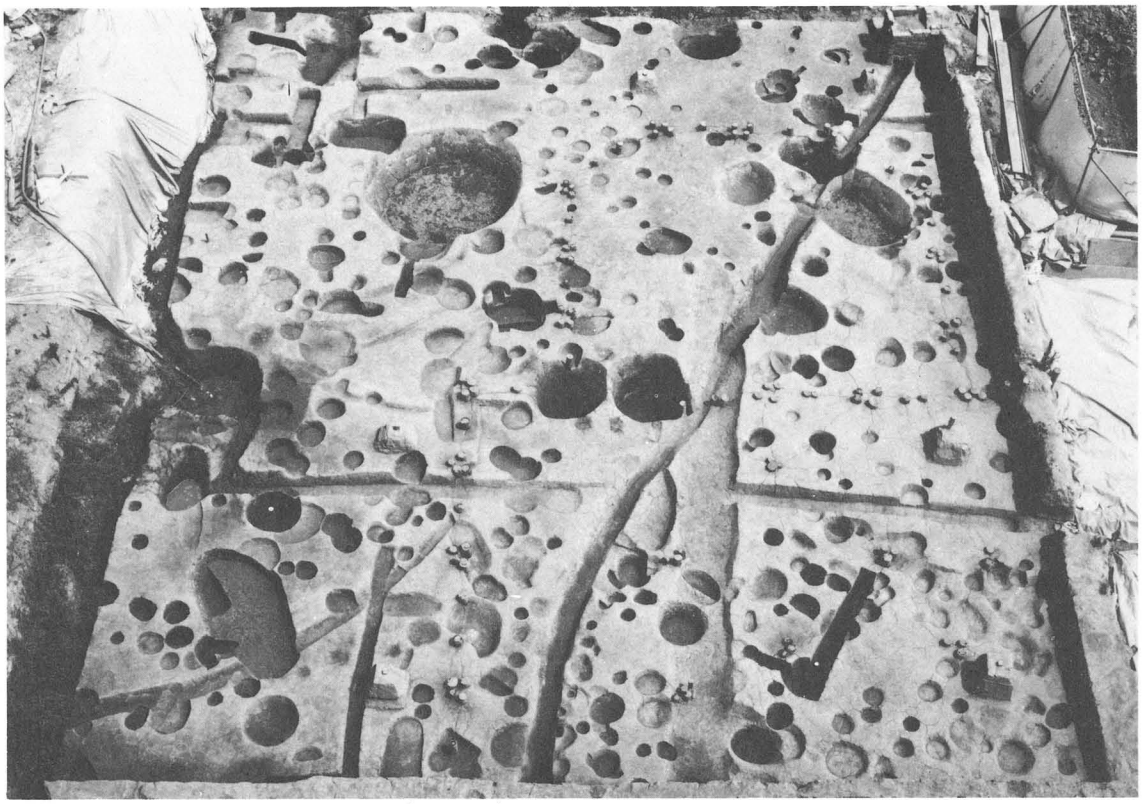
図版一　鹿田地区全体図と調査地点



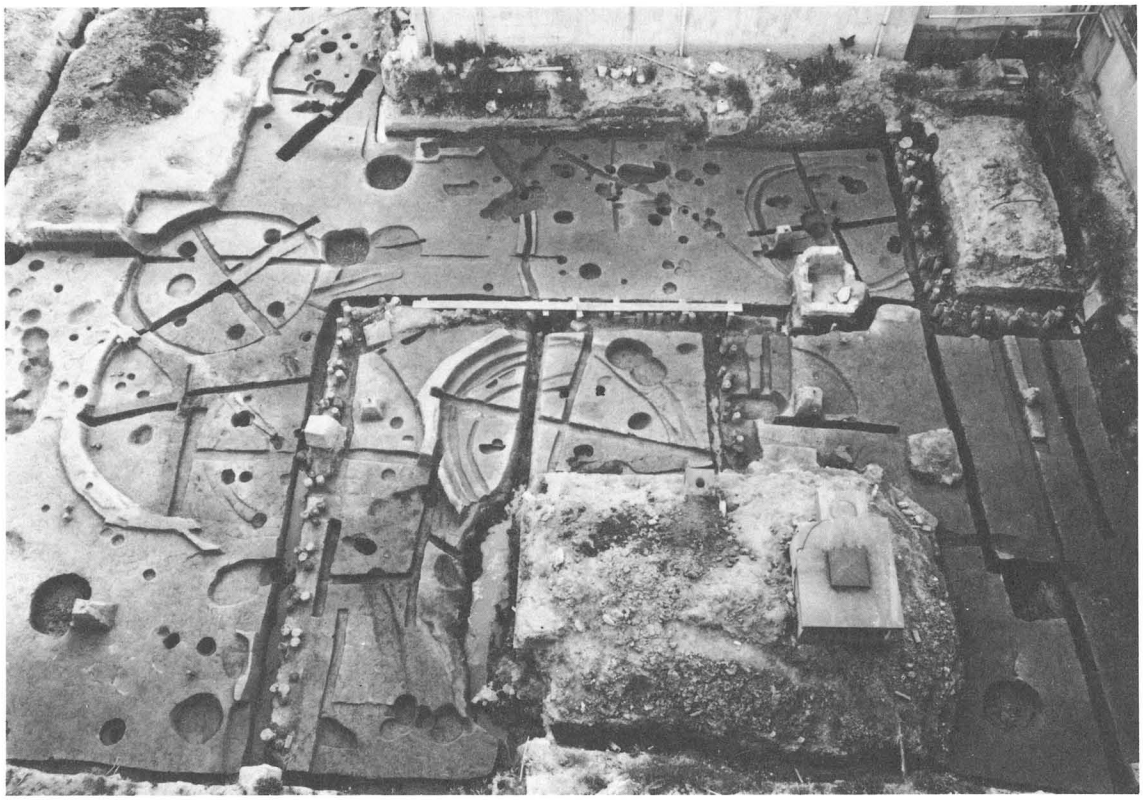
図版二　津島地区全体図


50 48 46 44 42 40 38 36 34 32 30 28 26 24 22 20 18 16 14 12 10 08 06 04 02 00
AA AC AE AG AI AK AM AO AQ AS AU AW AY BA BC BE BG BI BK BM
N
津島北地区
津島南地区
0
500m

図版三　鹿田遺跡AU～BD28～39区

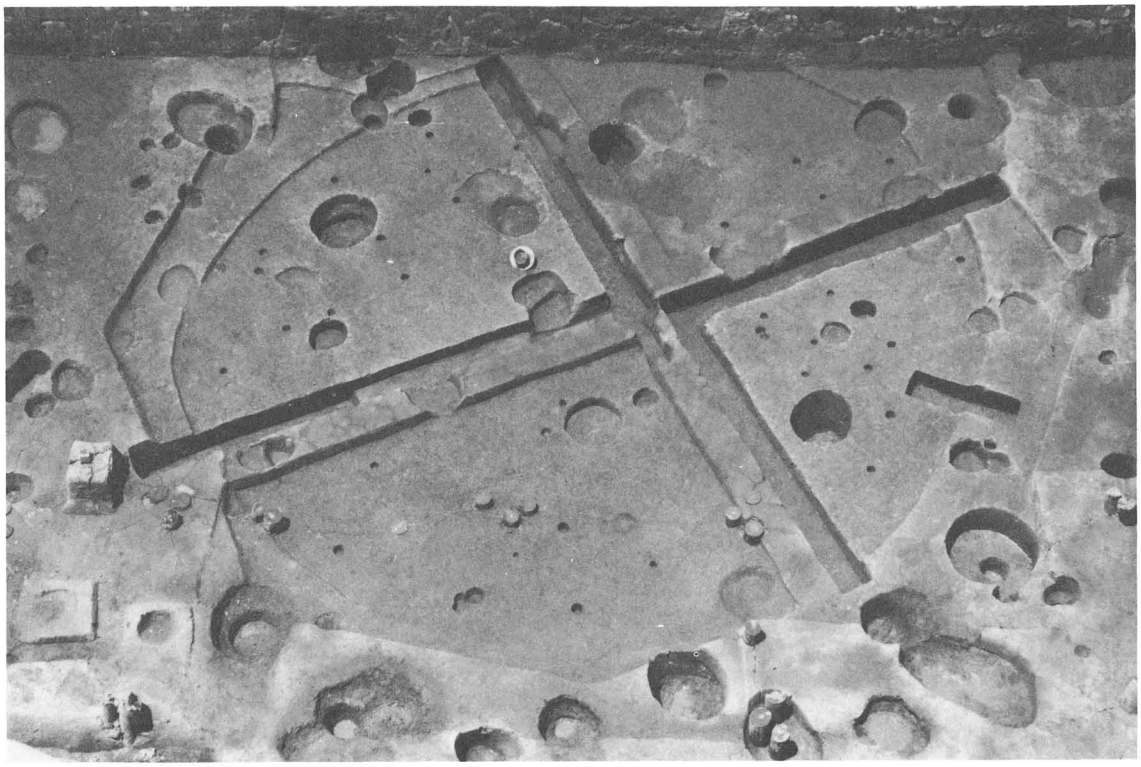


1　AW～BA36～39区付近（南から）



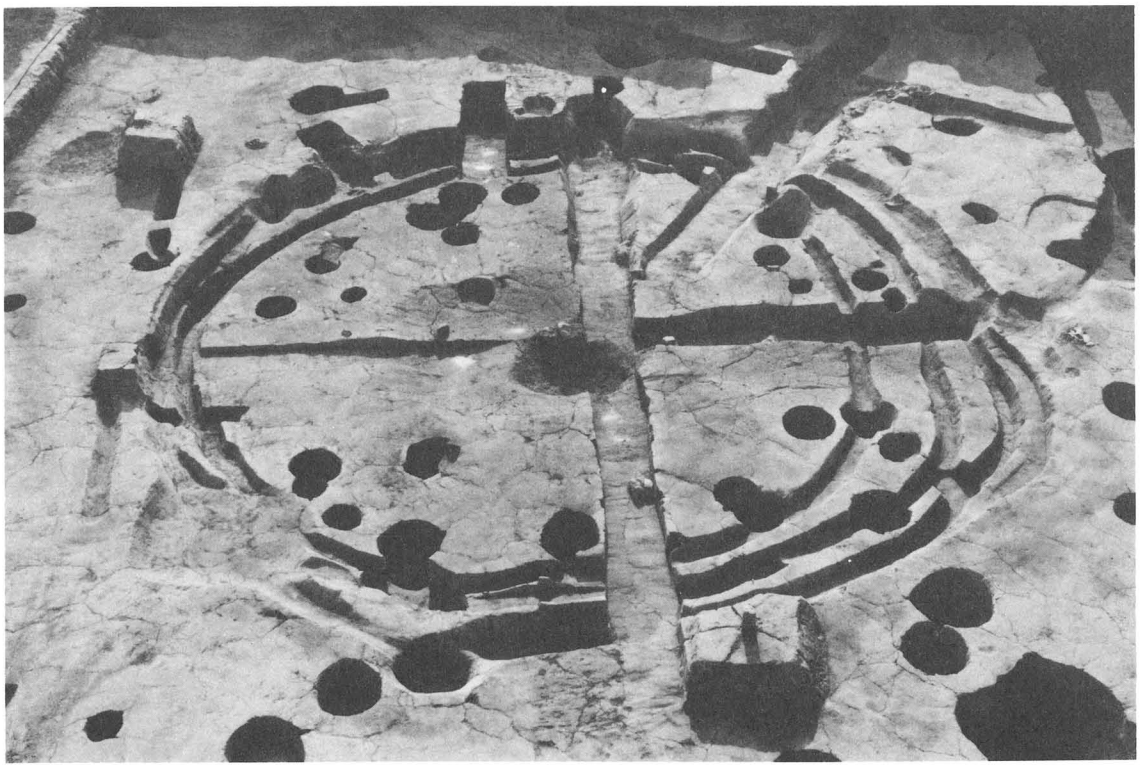
2　AU～BA28～32区付近（東から）

図版四　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区

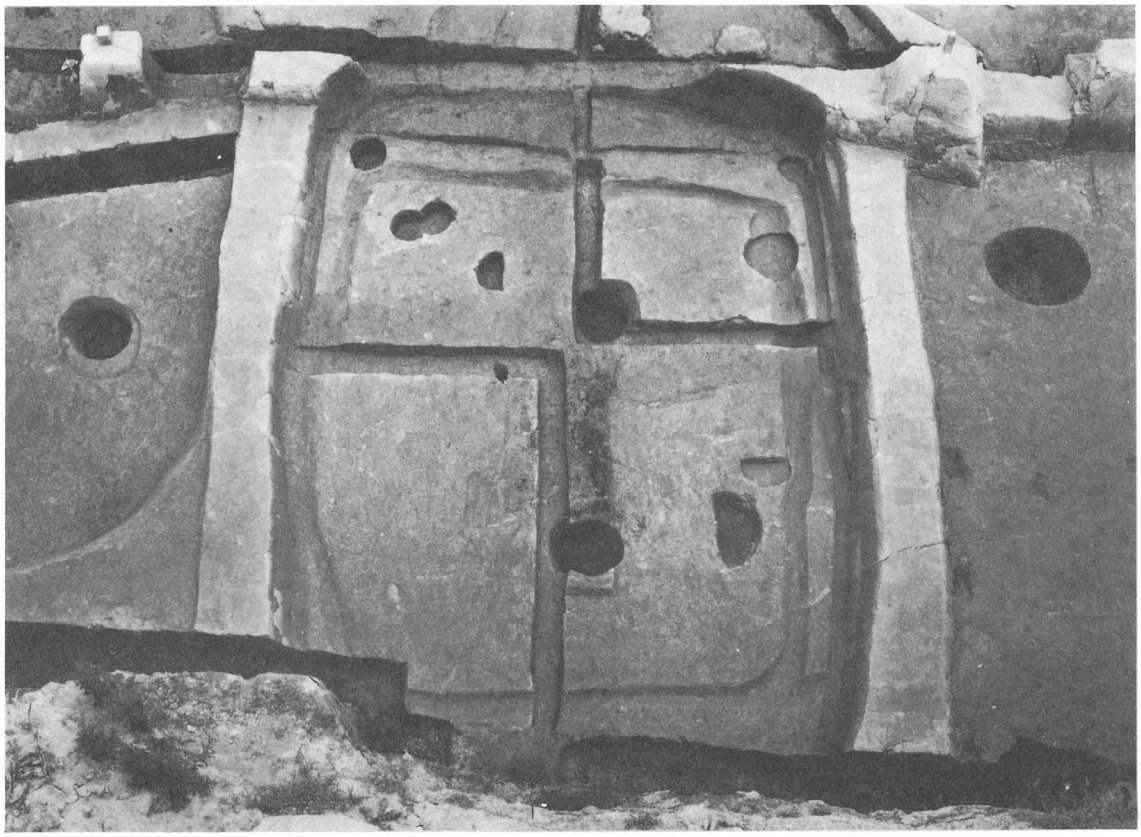


1　竪穴式住居址ＳＢ23（東から）

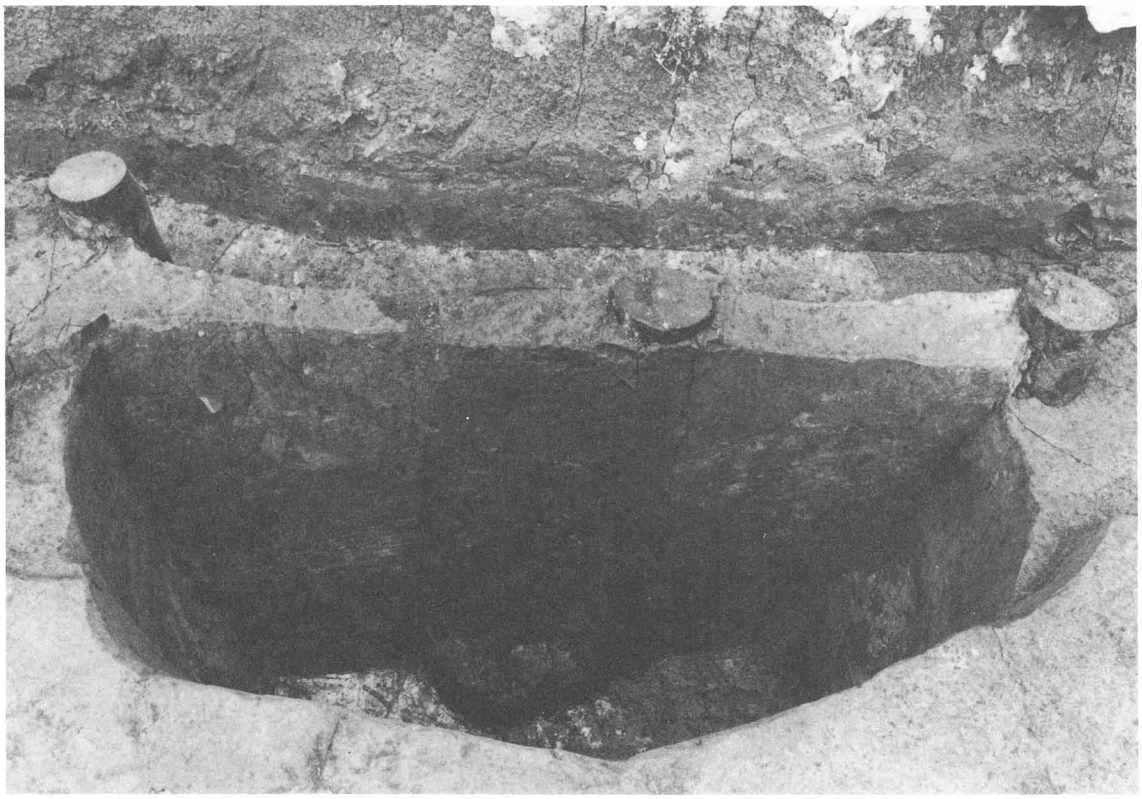
2　ＳＢ23出土遺物



1　竪穴式住居址 SB16（東から）



2　竪穴式住居址 SB24（西から）

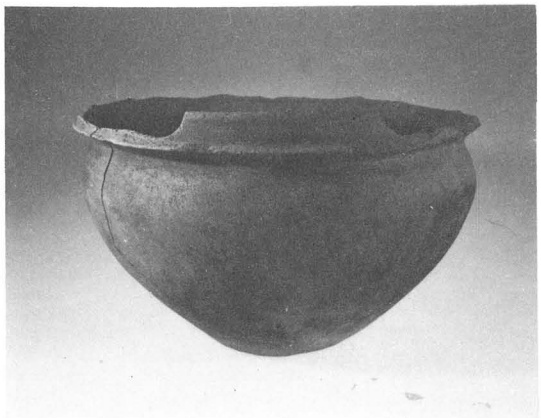


1　井戸 SE 22（西から）

2　井戸 SE 22（西から）

図版七　鹿田遺跡ＡＵ～ＢＤ28～39区

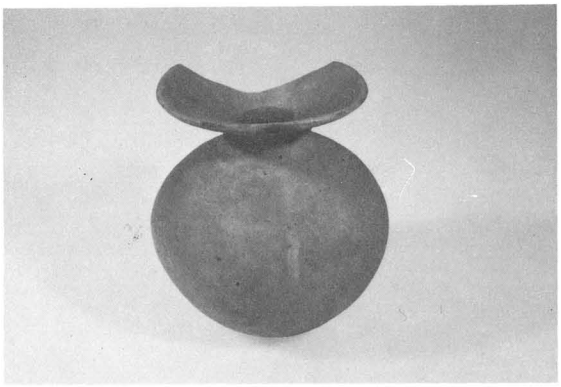
1　井戸 SE 25（東から）

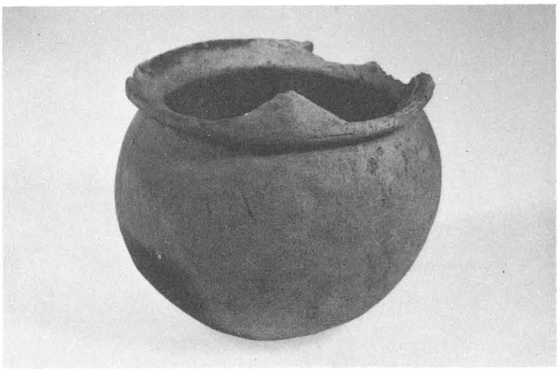


2　SE 25出土遺物

図版八　鹿田遺跡AU～BD28～39区

1　井戸 SE 50（北から）

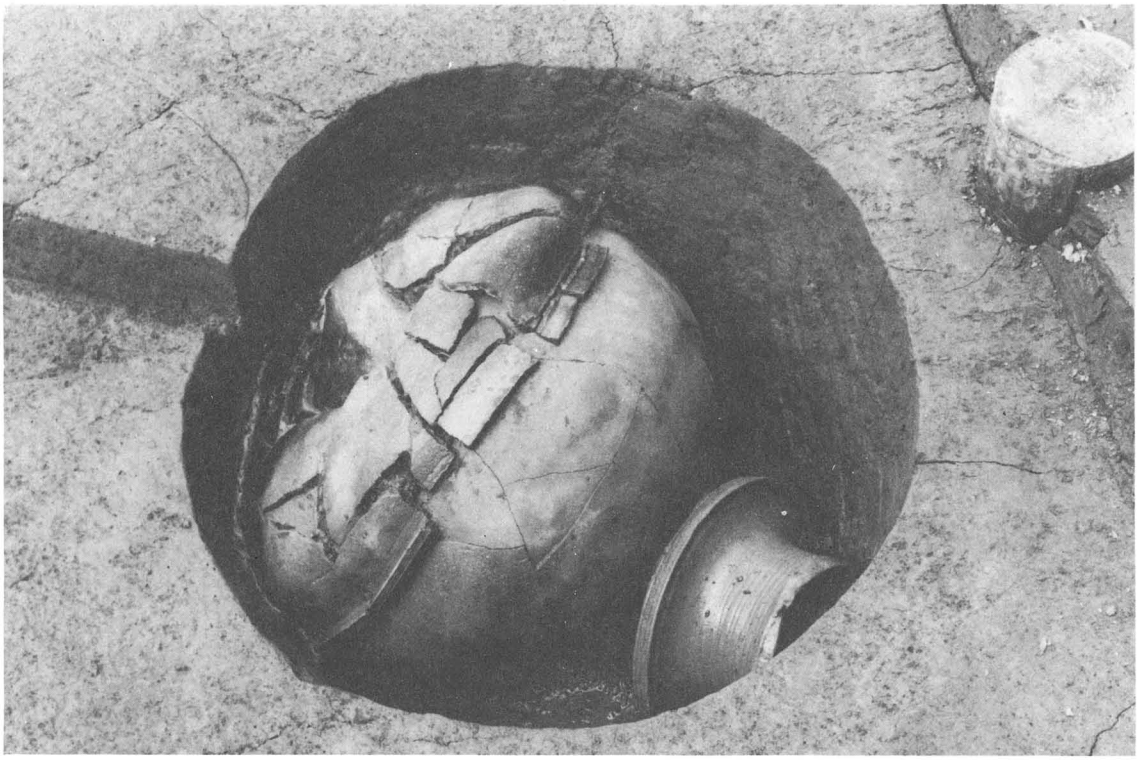




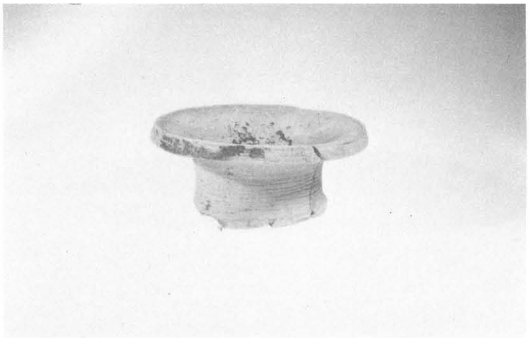
2　SE 50出土遺物

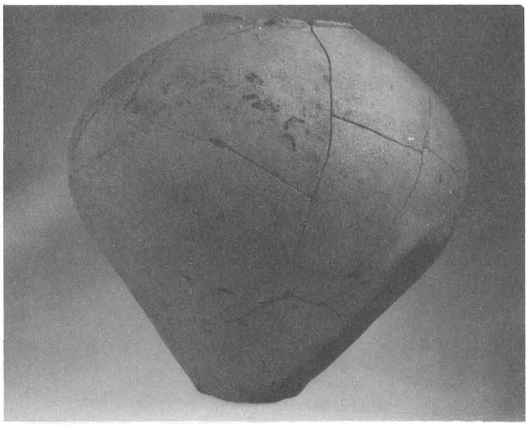
1　土壙SK122（北から）

2　土壙SK122（真上から）



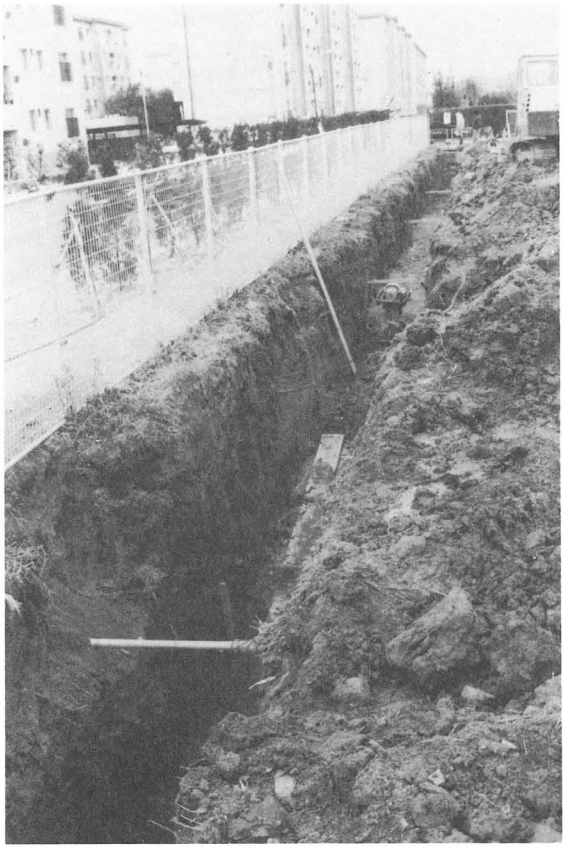
1　土器棺ＳＫ１（南から）



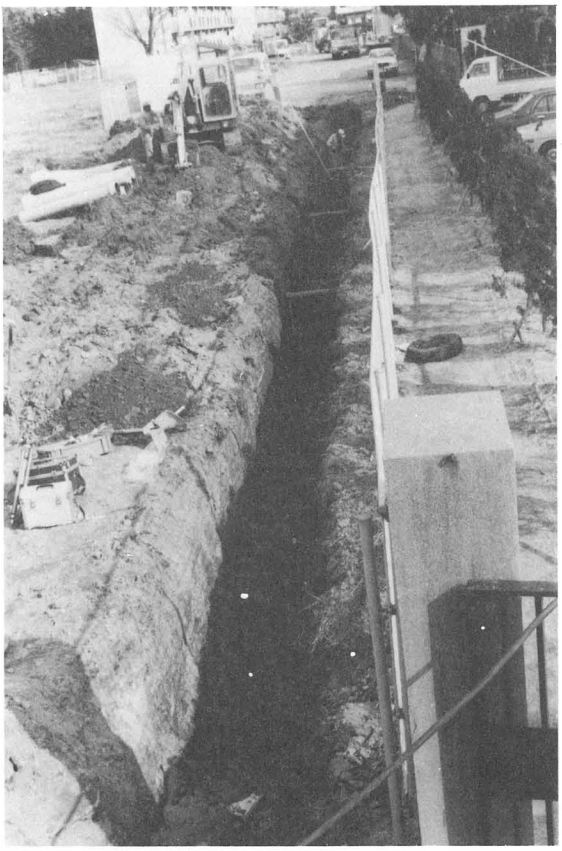


2　ＳＫ１出土遺物

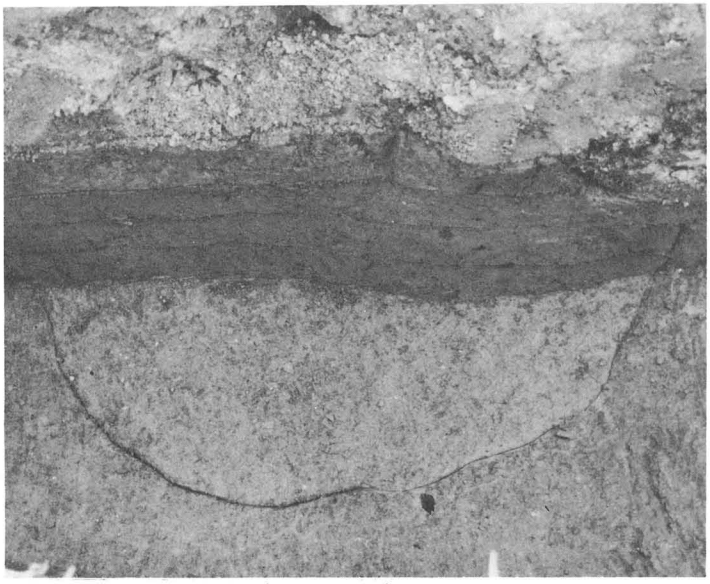
図版一一　津島南地区BI16～19、BJ18・19区



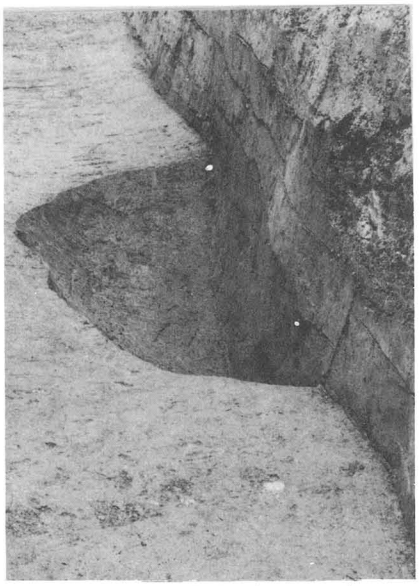
1　立合調査地点（東から）



2　立合調査地点（西から）



3　土壙検出状況（真上から）



4　土壙調査状況（西から）

昭和60年３月25日印刷
昭和60年３月30日発行

岡山大学構内遺跡調査研究年報２　昭和59年度

編集　岡山大学埋蔵文化財調査室
発行　岡山市鹿田２丁目５番１号
印刷　岡山印刷有限会社
岡山市南方２丁目６番20号
（0862）22－6353（代）